

# ファシリテーション

2011年3月から4年間の物語

# わたしたちに

特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会

災害復興支援室

2011年3月～2015年3月

# できること

# 〈わたし〉のちからを 〈わたしたち〉のちからへ

ファシリテーション (Facilitation) ——、人と人、人とコトとの関わり方に働きかけ、  
集団による学習や問題解決、未来創造などの場において

プロセスと結果がよりよいものとなるよう支援・促進することを意味します。

その役割を担うのがファシリテーターで、話し合いの場で

参加と相互作用を促す進行役などが分かりやすい例です。

特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会 (FAJ: Facilitators Association of Japan) は、  
ファシリテーションの普及を通じて、多様な人々が協働しあう自律分散型社会の発展を目指し、

2003年に法人として設立しました。30〜40代の社会人を中心に会員を増やし、

2015年5月現在、全国15の拠点で約1800名の会員が活動する団体となっています。

その最大の特長は、専従職員を置かず、多くの会員が自ら学んだ

ファシリテーションスキルを使って、すべてボランティアで運営しているという点です。

後に災害復興支援室長となる徳田太郎が、このようなユニークな特長をもつ

FAJの会長に就任したのは、東日本大震災の前年、2010年のことでした。

当時、すでに会員数は1200名を超え、各地で自律的な活動が展開されており、

さらに「現場に出よう!」の掛け声のもと、ファシリテーションを通じた

地域課題の解決に向けた取り組みも見られるようになっていました。

しかし徳田は、「公益を担うNPOとしては、さらなる一歩が求められるはずだ。

今後は、会員一人ひとりを起点とした取り組みだけでなく、法人を挙げて

社会課題に立ち向かうような活動が必要だろう」という強い思いをもっていました。

災害復興支援室を徳田とともに立ち上げることになる鈴木まり子、

遠藤智栄ちえも、当時は鈴木が副会長、遠藤が理事の職に就いており、両名とも

徳田の考えに通じるものを持っていました。三名ともファシリテーターや研修講師、

まちづくりのコンサルタントを生業としながら、ボランティア団体や他のNPO法人の

役員も務めるなど、いわゆる「ソーシャルな活動」を中心にしてきたため、

NPOと社会の関係性に対する目線は同じものを共有していたのかもしれない。

冒頭見出しに掲げた「〈わたし〉のちからを〈わたしたち〉のちからへ」という言葉は、

徳田が会長に就任した2010年度の事業計画の、前文に据えられたものです。

この前文は徳田が起案したのですが、次のように締めくくられていました。

「その〈ちから〉を社会的な〈うごき〉へとつなげていくための、

着実な一歩を踏み出さうではありませんか」。

このような社会との関係の在り方をさらに加速させようと、翌2011年度の事業計画を  
理事会で検討していた折、東日本大震災が日本列島を揺るがせたのでした。

この報告書は、FAJが、東日本大震災という未曾有の災害の中で、

法人としてどのように考え、どのような事業を行ったか、さらにいえば

一人ひとりのファシリテーターがさまざまな復興支援の現場でどのような振る舞いをしたかを、

記録を元に書き起こし、広く社会の皆さまにお伝えする一冊です。

多岐にわたる活動のほんの一端しかご紹介できませんが、発災以来、復興支援活動を

共にし、支えていただいた各団体の方々、これから社会的課題の解決に

立ち向かおうとする団体の方々、そして、ファシリテーションを学び実践しようとしている

個人の方々に、微力ながら何かしらのヒントとなれば幸いです。

地域コミュニティの  
再構築・  
住民主体の復興支援

支援機関同士の  
ネットワーク強化

災害復興支援室は、設置当初より「地域コミュニティの再構築・住民主体の復興支援」、「支援機関同士のネットワーク強化」を活動の軸としてきました。本報告書においてもこの二つの軸に沿ってご報告します

## 目次

〈わたし〉のちからを〈わたしたち〉のちからへ	2
4年間の軌跡。ファシリテーターの物語	5
あの時、ファシリテーターたちは	6
地域コミュニティとの関わり	
↳南相馬の事例から	13
支援する人たちとの関わり	
↳JCNの事例から	20
連携した皆さんからのメッセージ	
ファシリテーションで災害復興を	27
支援するということ	31
ファシリテーションによる災害復興支援	
その展開と考察	32
発災——、その時、あなたは？	
ファシリテーションという視点から考える	36
災害復興支援室アドバイザーから	40
資料篇	41
災害復興支援室活動一覧	42
ファシリテーション用語解説	46
特定非営利活動法人	
日本ファシリテーション協会概要	49
災害復興支援室概要	
活動協会会員	50
ごあいさつ	51

※本報告書でご紹介させていただく個人の皆様のご所属、職位は当時のものとさせていただきます

# 4年間の軌跡 ファシリテーターの物語

大きな災害から、人や地域が復興に向かう時、  
ファシリテーションをテーマとしたNPOである、日本ファシリテーション協会は  
その専門性や組織力を活かして、どのような貢献ができるのだろうか。

災害復興支援室は、そのような“問い”を持ちながら、  
東日本大震災の発災直後、協会内に設置されました。

次頁から、災害の復興支援に初めて法人として貢献しようと動き始めた経緯、  
そして、その後の活動をご紹介します。

なお、具体的な事例に関しては、災害復興支援室が自ら設定した  
「地域コミュニティの再構築・住民主体の復興支援」、「支援機関同士のネットワーク強化」という  
二つの活動領域に即して、さまざまな活動の中から、前者では南相馬市での活動を、  
後者では東日本大震災支援全国ネットワーク（通称：JCN）を中心に活動をご紹介します。



# あの時、ファシリテーターたちは

2011年3月11日、日本を襲った未曾有の災害、東日本大震災。

時間が経過するにつれて見えてくる各地での被害。

その中で、私たち、日本ファシリテーション協会は、自分たちの強みを活かして、被災された方たちにどのような貢献ができるのか、模索を始めました。

## ファシリテーターたちの3月11日

呆然とテレビの画面を見るしかなかった。そこにいる誰もが黙って見入っていた。韓国の仁川国際空港ロビー。徳田太郎は、口にする言葉も見つからず、ただただ、津波が街を襲う映像を見ていた。久しぶりの休暇で韓国に来ていたのだが、そのタイミングでこんなことが起きるとは…。帰国便は欠航となった。同じく足止めされている日本人旅行者で現地ツアーコンダクターが帰ってしまつた団体がいたため、自身のツアーコンダクターにそちらもサポートしてもらえよう交渉をするなどその場でできることをしていたが、一方

で、日本から遠く離れた地にいることに、じりじりと焦燥感がこみあげてきていた。

同じ頃、鈴木まり子は横浜市中心部に向かう路線バスの中にいた。戸塚区内で実施していたファシリテーション研修は地震のため会場が閉鎖となり途中で中止となった。鉄道はすべて不通。道路はひどく渋滞し、バスはのろのろと進み、いつ着くのか見当もつかなかった。外は停電で暗く、満員の車内は重苦しい空気に包まれていた。鈴木は、ふとバッグの中に飴が入っていることを思い出した。

「あの、よかつたら、これどうですか」明るい

声で周囲の乗客に声をかける。「ありがとうございます」手にした者は口々に礼を言った。つられように、飴や菓子を持っている人が配り始め、それをきっかけに今日体験したことなどポツポツと会話も生まれだした。

結局、何もしなければ一時間くらいは横浜駅に着いたのは出発してから六時間後、すでに23時をまわっていた。皆かなり疲れていたが、不思議と車内の雰囲気は出発時とはだいぶ違うものになっていた。鈴木は、そのまま横浜駅で一泊することになった。

仙台市に住む遠藤智栄は、最初の揺れが襲つて

きた時、市内のカフェでF A J 仙台サロン（当時）の例会の打合せをしているところだった。激しい揺れがおさまった後、徒歩で自宅マンションに帰ったが、電気、ガス、水道が止まっていたため、付近にあるNHK仙台放送局に行き、そこで見た映像で初めて沿岸部の津波の被害を知った。これは、大変なことになった。

自宅マンションはそれほど大きな被害を受けていなかったためその日は部屋で一夜を過ごしたのだが、他の住民のことが気になった。「私たちは運良くケガひとつしていないが、他の人たちはどうだろうか？」翌日、遠藤はイーゼルパッドを取り出し、そのうちの二枚をマンションの一階に貼り出した。一枚には、「みなさんの状況をご記入ください」と記した文字とともに各戸の部屋番号



遠藤がマンション1階に貼り出した連絡表。各戸の状況がひと目でわかる

を記した表を、もう一枚には「ベランダの壁に破損がある方ご記入ください」と書き、その横に太い水性ペンをひもでぶら下げた。安否確認の表には徐々に各戸の安否が記入されるようになり、その前を通る住民たちを安心させた。

### 災害復興支援室の設置

韓国の徳田は、翌12日の便で帰国できることになった。つくば市の自宅に戻ってからはやるべきことが山積みだった。徳田はファシリテーターを生業とするとともに、F A J の会長、茨城NPO センター・コモンズの理事、つくば市民大学を運営するユニベルシタスつくばの代表幹事と、多方面で活動をしていた。特に全国に会員がいるF A J には被災した人もいるかもしれず、会員の安否を案ずる人も多いだろう。徳田は、全会員が登録されているメーリングリストにメッセージを発した。

今般の東北地方太平洋沖地震に関しまして、まだ事態は流動的ですが、取り急ぎひとこと申し上げます。

まずは、被災をされたみなさまに、心よりお見舞い申し上げます。また、さまざまな形で救済・支援に携わっていらっしゃる方も多いかと

存じます。本当に頭の下がる思いです。

被災地のみなさまへ。まずは、ご自身やご家族の安全を第一になさってくださいませ。全国の仲間も、それぞれの形で応援しています。そして、ちょっとでも気持ちに余裕ができた方は、ご無理のない範囲で、ぜひ周りの方にもお声をかけていただければと思います。心身等に障碍のある方、病気や怪我の方、高齢の方や乳幼児をお連れの方、日本語が不自由な方、そして、さまざまな不安を抱えている方など、声を掛けあい、励ましあうだけでも、そこから必ず力が生まれるはずですよ。

全国のみなさまへ。まずは、それぞれのふだんの現場で、ふだんの活動をするのが、いま私たちにできる、最大の支援です。そして、さまざまな形で「共助」の動きが生まれています。情報を冷静に見極めつつ、それぞれの得意分野や、F A J で身につけたマイルドとスキルを最大限に発揮して、できることから少しずつ状況を動かしてまいります。

余震が続いています。どうかご注意ください。乱筆乱文、ご容赦くださいませ。

ここで注目したいのは、早くも現状に対してファシリテーションによる何かしらの支援を示唆していることだ。

茨城県内でのさまざまな支援活動に携わりつ

つ、先のメールの三日後、徳田はFAJの理事会  
メンバーリストに新たなメールを投稿した。

震災に関して、法人としてできること、すべ  
きことを、短期―中長期で整理したいと思いま  
す。

短期的に大切なこととして「安否確認」があ  
りますが、こちらはすでに、小藤<sup>こと</sup>さんはじめ事  
務局のみなさんに、鋭意進めていただいております。

そして、中長期では、われわれの強みを活か  
した活動をしていくべきかと思えます。すで  
に、停電や原発に関連し、専門家と市民との橋  
渡しをする科学コミュニケーションの必要性が  
いわれたりしていますが、それ以上に私たちの  
得意分野でいえば、臨時コミュニティにおける  
コミュニケーションでしょう。

すでに本日から、福島県民の被曝を避けるた  
め、茨城県内への受け入れが始まっています。  
また、今後は、仮設住宅等の建設も進みます。  
ぜひ今から、少しずつ「うごき」を考えていき  
たいと思います。理事会での検討、事務局での  
サポートをお願いいたします。

ただ残念なのは、遠藤さんと徳田が、少なく  
ともしばらくの間は、それぞれの現場の「うご  
き」で手一杯となってしまうということです。  
そこで、必要があれば、フェローのみなさん、

神戸での知見を有する会員さんなどを含めた、  
特命プロジェクトを立ち上げてほしいと思いま  
す。

本日13時には、「震災ボランティア・NPO  
と政府の連携を考える会」も行われます。私た  
ちも、NPOの一員として、自らの強みを活  
かしていきましょう。

徳田が特にここで伝えたかったのは、FAJが  
NPO法人として何ができるか、何をすべきか、  
ということだった。これに対し、すぐに反応を示  
したのが鈴木まり子だった。

徳田さんの投稿に対する鈴木<sup>の</sup>考えを記しま  
す。

今：安否確認と緊急対応に関して、法人として  
議論している時間がないと判断したものは、個  
人で動く。善意での行為に関しては、理事会も  
規程などにこだわらず寛大に。

短期：開催可能な地域では、定例会やイベン  
トを安易に中止しないで、長期的にFAJが  
FAJらしく復興に貢献するために、質の高  
い学びや対話の場をつくり、それぞれのファシ  
リテーションの能力を高めておく。また、身近  
で緊急に話し合いのファシリテーターが必要な  
場合、従来のプログラムよりゆるい条件でファ  
シリテーターを募集することも委員会で議論し

てほしいと思います。

長期：これから長い復興の道がはじまりま  
す。色々な対立や課題解決の話し合いが続くで  
しょう。そのとき、「FAJをどんどん使っ  
てください」といえるだけの力を持った団体に  
していかなければいけません。今は、メデイ  
アも人もこの震災に関心があります。でも、  
FAJは、メディアが取り上げなくなり、人々  
が関心を持たなくなっても支援を続けたいと思  
います。

今後について：徳田さん、遠藤さんの代わり  
になれるか分かりませんが、社会への窓口係と  
して、特命プロジェクトの立ち上げに動きま  
す。そのときのメンバーは、FAJの会員に  
限らず、プロフェッショナルなファシリテ  
ーターも視野に入りたいと思います。

なくてはならないFAJになるために。

鈴木は父親が長年ボランティア活動に携わって  
いたため、幼いころから自然に社会的な活動に親  
しんでおり、思いも強いものがあつた。学ぶこと  
も大切だが、それは社会に貢献するためのもの。  
FAJとして、もっと社会的課題の解決に積極  
的に関与していきたい―そんな思いが以前から  
あつたのだ。

この二人からの投稿に対し、監事の田坂逸朗<sup>いっろう</sup>も  
共感の反応を示した。それに意を強くした鈴木



は、翌17日には次回理事会への議題を提出。なんとしてもこの「特命プロジェクト」はカタチにしたい。もし認められないのなら個人で動こう。そこまで思いつめていた。

3月27日、発災後初めての理事会が行われた。通常は全国の理事が一同に会して行うが、この日は東京、大阪の2会場をスカイプでつないでの実施だった。東京会場は、電力不足が社会問題になっていくことから照明を減らし、暖房も抑え気味にしてーという状況だった。議題はいつにも増して多かったが、鈴木が提出した「特命プロジェクト」設置は最初に話し合われ、予算と共に速やかに議決された。「災害復興支援室を設置、ボードメンバーとして徳田、鈴木、遠藤の三名を指名し、その他のメンバーの人選や活動計画はすべてこの三名に委任する」というものだった。震災の被害は今も進み続けている。月一回しかない理事会でじっくりと話し合う余裕はないという判断だ。

さらに理事会後には、事務局機能を担うクルーとして田頭篤、小藤輝正、杉村郁雄の三名に、アドバイザーとしてF A Jフェローや阪神淡路大震災での活動経験者である池田隆年、加留部貴行、黒田由貴子、中野民夫、西修、堀公俊の六名に、それぞれ就任を依頼することになった。こうして災害復興支援室としての活動がスタートした。

## そして、現地へ

仙台で被災した遠藤はNPOや地域・自治体のまちづくりを支援することを職業としていたため、すでに被災地でのボランティアセンター運営協力など、さまざまな支援活動に入っていた。徳田、鈴木は遠藤とのミーティングを持ちたかったが、それが叶わない。どうしたものか…。そんな折、遠藤から短いメールが送られてきた。

「二人で、こっちに来ない？」

遠藤が来られないなら、こちらから行けばよい。しかも、現地に行くことで多くの情報を得ることもでき、今後の活動へのヒントも必ず見つかるだろう。三人はさっそくスケジュールを調整し、4月8日～10日の三日間、仙台を拠点に岩手、宮城、福島の子県を回って現地の方々から話を聞くとともに、三人でこれからの活動を話し合うことにした。

しかし、三人には若干の無理があった。「こんな時に、ただ話を聞くだけで被災地に行つてよいのだろうか…。もちろん、この後の中長期的な支援を見据えてのことだ。それでも何か釈然としないものがあつた。

「文具レスキューパックを届け



FAJ 会員から送られてきた文具類をセットにまとめた「文具レスキューパック」。ヒアリング出発前日に15セットが用意された

る」というアイデアは、そんな思いも影響したのかもしれない。「避難所やボランティアセンターではペンや紙が不足し、段ボールの切れ端を使っているところもある」という遠藤の情報から、ファシリテーションの現場で使用することの多い文具類を一まとめにしたパックをつくって持つていくことにしたのだ。徳田は早速、会員メンバーリストで文具類の寄付を呼びかけた。一括して購入することも可能だったが、「広く呼びかけることで、多くの会員に支援活動に参加してもらいたい」という鈴木のアイデアからだった。

呼びかけから四日後の4月7日、日時指定の宅配便がつくば市民大学に続々と届いた。開封済みだがまだまだ新しいもの、このために新たに購入したと思われるもの。大量のマーカーやコピー用紙を、「荷造りを手伝いたい」と神奈川県から駆けつけたF A Jの会員と共に徳田が仕分け、最終的には15セットの「文具レスキューパック」が完成した。また、パックの中には、被災地を想定したうえで、急遽アドバイザーの西と堀の協力のもと制作した「情報を見える化しませんか」リーフレットも入れ、使い方のアドバイスもできるようにした(※)。

※「情報を見える化しませんか」リーフレット：日本ファシリテーション協会ウェブサイトの災害復興支援室ページよりダウンロード可能 ([https://www.faj.or.jp/modules/contents/index.php?content\\_id=4935](https://www.faj.or.jp/modules/contents/index.php?content_id=4935))

最大規模の余震があった翌日の4月8日。徳田と鈴木は仙台へと向かった。徳田の車の後部座席には、ガソリン携行缶や携帯トイレ、水、そして文具レスキューバックがうず高く積まれていた。常磐道・磐越道・東北道とも、路面には多くの段差が残るものの、報道で聞いていた開通当初の悪路は解消されていた。すれ違う車のほとんどは緊急車両だった。

仙台までの車中、会話が途切れることはなかった。震災後の日々のこと、ファシリテーションのこと、そしてこれからの災害復興支援室のこと。4時間はあっという間だった。

遠藤宅に着くと、三人はすぐに宮城県災害ボランティアセンターを訪問した。ここには地元はもちろん、全国から駆けつけたNPOや各地の社会福祉協議会など十数団体が支援に入っており、毎日18時から定例ミーティングが行われている。三人は、持参したレスキューバックを渡すとともにさっそく会議に同席し、現地での情報収集をスタートした。ミーティング終了後にも、「支援P（災害ボランティア活動支援プロジェクト会議）」、「全国社会福祉協議会近畿・中国・四国ブロック」、「せんだい・みやぎNPOセンター」、「防災科学技術研究所」、「宮城県社会福祉協議会」、「つなプロ（被災者をNPOとつないで支えるプロジェクト）」など、多くの団体から個別にヒアリングの時間をもらうことができた。

ヒアリングをしながら、三人はあるルールを自然に共有していた。それは、ファシリテーションという「こちら側の視点」だけで聞かない、現地で支援に携わっている人たちの思いも一緒にお聞きする、というものだった。

9日は、岩手県一関市の「いちのせき市民活動センター」へ向かった。同センターを市から受託しているレスパイトハウス・ハンズ<sup>※</sup>の代表の小野仁志さんはFAJ会員でもあったのだ。「ファシリテーション」という共通項を持っていたこともあり、ヒアリングは充実した時間となった。また、四月末に「いわて連携復興センター」が結成される予定であり、小野さんがその設立メンバーに入っていることから、その第一回会議でFAJとして何らかのお手伝いができないか、検討して



一関市でのヒアリングとレスキューバックの提供。現地ならではの情報をうかがった。奥右が会員の小野寺浩樹さん、奥中が会員の小野仁志さん

いただくこととなった。

この日はもう一人、やはりFAJ会員で、仙台市にある「杜の伝言板ゆるる」の代表を務める大久保朝江さんに会い、ファシリテーションによる復興支援の可能性について意見交換をした。そして10日は、福島県いわき市の「いわき市勿来地区災害ボランティアセンター」を訪問し、「国際NGOシャプラーニール」市民による海外協力会」などへのヒアリングを行って、活動は終了した。

三日間という限られた時間ではあったが、どのような被害があり、どのような人たちが苦しんでいるのか、どのような人たちが支援を担っているのか、その一端を垣間見ることができた。災害復興支援室では、すでに「地域コミュニティの再構築・住民主体の復興支援」と「支援機関同士のネットワーク強化」という二つを活動の柱として設定していたが、この段階ではまだ前者のニーズが顕在化するには至っていないのに対し、後者、すなわち支援機関をつなぐ活動においては、ファシリテーションがすぐにも求められているというのが三人に共通する感覚だった。実際、東京では遡ること3月30日に「東日本大震災支援全国ネットワーク（以下、JCN）」の設立総会が開催されており、FAJからも徳田と小藤が出席して、その後の連携・協働につながる最初の一步を踏み出していた。

## ファシリテーションによる支援開始

徳田と鈴木が再び被災地に向かったのは4月28日。岩手県釜石市で開催される「いわて連携復興センター」の設立総会にファシリテーターとして参加するためだった。

総会は、津波による大きな傷跡が残る市営釜石ビルで行われた。部屋には椅子もなく、二十名前後の参加者が全員立ったままでの会議となった。

設立総会の日程には、「いわて連携復興センター」の代表理事、鹿野順一さんの強い思いがあった。この日は、3月11日から数えて四十九日目にあたるのだ。総会は黙祷で始まり、14時46分には再び黙祷が行われた。

徳田と鈴木はこの日、参加者の発言を「見える



釜石市で行われた、いわて連携復興センター設立総会。鈴木と徳田が対話の進行とファシリテーショングラフィックを担当した

化」するためのファシリテーション・グラフィックの担当として参加していたが、会が始まる数分前、鹿野さんから「ここにいる方同士がそれぞれの思いを話し合えるような交流の場をつくってもらえませんか？」と依頼された。二人はさっそく「現場力」を問われることになったのだ。

交流の時間。鈴木はその場に居る人たちに三人程度の小グループに分かれてもらい、今思っていること、感じていることを話すように促し、その上で、各グループでどのような話が出たかを皆で一緒に聞く流れとした。どのグループからの話にも、四十九日間のそれぞれの思いがにじみ出ており、会場はじっと耳を傾け続けた。静かにうなずく者、目に涙を浮かべている者、部屋は静かな一体感に包まれた。

この釜石訪問のもう一つの目的は、東京近辺で活動するファシリテーション仲間が企画した「まぐずやっぺしかまいし」というイベントのサポートだった。5月4日・5日の二日間、被災された方々に少しでも明るい気持ちになってもらおうと、さまざまなイベントを行うことになっていた。しかし、中心メンバーこそいるものの、あとは「何か力になりたい」という思いを持つ有志が三々五々集まってくる、端的に言えば「誰が来るか、何をするかはその時にならないと分からない」という状態。もっともこの時期、被災地ではどこで

も同じようなことが起きていた。大型連休ということもあり、全国からボランティアに駆けつける人々を、各地のボランティアセンターは必死になってコーディネートしていたのだ。

そこで二人は、このイベントのコーディネーター役を担うことにした。思いは同じだが初めて会う者同士、どうすればより動きやすくなるか。徳田は何枚もの模造紙を壁一面に貼り、近隣の地図や注意事項を書き出すとともに、いくつかの表を作成した。どこから来たのか、何を持ってきたか、何ができるか、いつ来ていつ帰るのか、交通手段は何か…。集まってきた者たちはそのフレームを目にし、すぐに意図を把握し、自ら書き込んでいった。



壁一面に貼られたファシリテーショングラフィック。面識のないボランティアや団体がこれらを読み飛ばさずさまざまな情報が共有できるフレームになっている

徳田は東京での活動のため5月1日に釜石を  
発ったが、入れ替わりでやってきた杉村郁雄が、  
この模造紙にある情報をもとにイベント全体の統  
括機能を担った。朝・昼・夜と一日三回行われる  
ミーティングでは、鈴木と杉村がファシリテー  
ター役を担った。

5月4日、イベント初日の参加スタッフは30人  
に及んでいた。準備期間中にスタッフが植えた花  
が明るい彩りを添える青葉通りを中心に、さまざ  
まな催しが行われ、避難所や半壊の自宅から、釜  
石市民が集まった。シンガーソングライターによ  
るミニライブ、甘酒とおしゃべりを楽しむ「お  
茶っこ」、子どもたちが遊べる夢列車などさまざ  
まなプログラムが盛り込まれていた。特に餅つき  
は、イベント関係者だけでなく、釜石の強豪ラグ  
ビーチーム「シーウェイブス」の選手や、避難所

にいた地元の方々も代わる代わるつき手になり、  
震災の傷跡の残る釜石にひとときの活気を蘇らせ  
た。賑やかに笑い声が弾む一方で、地元の方がほ  
つりぽつりと話す言葉に、スタッフが静かに耳を  
傾けている光景も見られた。

鈴木と杉村には期間中、もう一つやることが  
あった。同日に開催される「第一回釜石市復興ま  
ちづくりワークショップ」での、ファシリテー  
ション・グラフィック。このワークショップは、  
建築家の伊東豊雄氏などの専門家・学識者を交え  
つつ、市民が今後の釜石市の復興のあり方を議論  
するものである。鈴木と杉村は、同じくFAJの  
会員でありイベントの中心メンバーであった浦山  
絵里（後に災害復興支援室メンバーとなる）と三  
人で、すべての発言を模造紙に「見える化」して  
いった。この模造紙はワークショップ終了後も会

場に掲示され、「どのようなことが話し合われた  
のか」を多くの市民が確認するためのツールとし  
て用いられることとなった。阪神淡路大震災を体  
験した方が参加者の中にいらっしやう、「こんな  
ふうに模造紙に書き出すやり方があの頃あつた  
ら、神戸の復興も違っていたかもしれない」と発  
言されたのが印象的だった。

## ファシリテーションで、何が可能か？

二日間のイベントを終えて、鈴木と杉村は、  
「ファシリテーションで復興支援をすること」に  
関する思いを語り合った。この二人だけでなく、  
災害復興支援室設置以来、徳田も遠藤も何度とな  
く口にしてきたこと。FAJは、法人として、初  
めて大規模災害からの復興支援という活動に踏み  
込んだ。しかし、この2ヶ月を振り返って、自分  
たちは本当に「ファシリテーションでの復興支  
援」ができているのだろうか？ たとえばこの数  
日間、釜石で自分たちがやってきたことは、ファ  
シリテーションなのか？ …もちろん、このよう  
な大きな問いは、すぐに答えが見つかるものでは  
ない。つまり、これからの支援活動は同時に、こ  
のような問いに答えを見出していく過程でもある  
のだ。

ファシリテーションによる災害復興支援とは、  
どのようなものなのだろうか――。



釜石でのイベント、ミーティングの1シーン



釜石でのワークショップ。鈴木、杉村、浦山  
がファシリテーショングラフィックで話し合いの  
“見える化”をした



# 地域コミュニティとの関わり 南相馬の事例から

地域コミュニティの  
再構築・  
住民主体の復興支援

—「ご縁を紡ぐ」ということ—  
お互いの関係性をつくる

F A J 災害復興支援室のメンバーが最初に福島南相馬市を訪れたのは、発災からちょうど半年後の2011年9月11日だった。南相馬の復興に向けて活動していた任意団体「つながろう南相馬」の高橋美加子さんから「何かをしたいと思って集まるのだが、話し合いがうまくいかない」との相談を受けた。何をしたいと思っているのか、どんなことで困っているのか、F A J にお手伝いできることがあるのかなど、まずは直接会って話を聴きに行くことになり、鈴木と、尾上昌毅おのうえまさき、甲州潤こうしゅうじゅん（両名とも後に災害復興支援室メンバーとなる）が、徳田の運転する車で南相馬へと向かった。

途中、全村避難となった飯館村や津波の被害にあった沿岸部を通り、震災の日から時間が止まっ

ているような光景を目にして、四人はあらためて復興への長い道のりに思いを馳せた。

「つながろう南相馬」は、背景を異にする四人（高橋さん、須藤栄治さん、宮森佑治さん、高村美春さん）のメンバーで構成されており、原発事故、そしてその後の大きな環境の変化でばらばらになってしまった南相馬の人たちがもう一度つながるためにはどうすればいいのかを、真剣に模索していた。

南相馬市内でクリーニング店を営む高橋さんは、3月11日から今日まで、南相馬でどのようなことが起きたのかを思い返すかのように話してくださった。原発事故の直後は自分もいったん避難したが、経営しているクリーニング店で預かっている喪服が必要になる人がいるかもしれない、お店を開けなければならないと、数日後には戻ってきたこと。物資はまったく届かず、いつの間にか報道関係者もいなくなっていたこと。東京など他

の地域から来ている企業がどんどん南相馬を去り、残ったのは地元の商店だけだったこと。自分たちが、他の地域から、そして社会から分断され、見捨てられたように感じたこと。そして、そのような中での人々の暮らしやまちの様子、原発や除染の現状など、堰を切ってあふれ出たかのような言葉は、尽きることがなかった。

高橋さんは、発災から半年経った今、あらためて「つながろう南相馬」のメンバー一人ひとりが何を思い、考えているのかを話したいと思っていた。「なんとかしたいんだわ」。その口調からは、先の見えない状況の中で、それでも何かをしよう、何かをしなければならぬという強い意志が感じられた。短い時間の「滞在」を終え帰る車中で、同席していた尾上は、「こんなにもたくさんの方が亡くなってしまったこのまちで、私がまず何を置いてもやんなくちゃならないのは、家族や親戚を亡くした人がせめて喪服を着てお葬式に行けるよう、自分の店を開けることだ」と言い

切った高橋さんの言葉を、何度も反芻していた。何が何でも南相馬に一刻も早く戻ってお店を開ける、という地元のクリーニンング店の使命感を越えた思いに胸が熱くなった。

三週間後の10月4日、徳田と杉村が再び南相馬に向かった。目的は、「つなごろう南相馬」の四人がそれぞれの思いや考えを語り、聴き合う場をつくること。メンバーの一人が経営する飲食店「だいこんや」がその会場となった。

話し合いは杉村が進行し、参加者全員で「アウトカム（目指す状態）」を始めとするOARR（※）を決めるところからスタートした。アウトカムは「つなごろう南相馬の今後の方向性が見い出されている状態」。そのために、メンバー四人の思いや考えを互いに聴き合うことを中心に進めること。「いま・ここ」に集中できるように、携帯電話をオフにして、いよいよ本題へと進んだ。

まずは、二人ずつ二組に分かれ、「過去半年間に起きたこと、感じたこと」をじっくりインタビューしあう時間を設けた。そして、聞き役の人から話した人の内容を皆に紹介してもらおう（いわゆる「他已紹介」をし合う）ことで、少し客観的に自分のことを振り返ってもらいつつ、徳田がキーフレーズを模造紙に書き留めていった。

話し終わると、その中からメンバーが大切にし



「だいこんや」での話し合いの1シーン。話し、聴き合う気持ち、落ち着ける場所、そして模造紙とペンがあれば、話し合いは前に進んだ

ていること、やってみることが少しずつ浮かんでくるようだった。「今まで自分たちは、がんばっているいろいろなことをやってきたけど、もっと多くの南相馬の人たちに関わってほしい」というのが、四人の共通の思いだった。

杉村が「三年後、五年後の将来は見えづらいですが、まずは半年後、何をしたいか、何をすべきかについて話してみましようか」と投げかけるのと、「福島市で開催されるふくしま会議から南相馬へのバスツアーを実施する」などの具体的なアイデアが生まれ始めた。これまで語られなかったことが言葉になり、少し先の希望やその後の行動につながっていく。ファシリテーターの二人に

とつても、非常に印象に残る場となった。

話し合いを終えた後、徳田が「いまの話し合いで、どのような工夫をし、どのようなことに気をつけていたか」という「進め方の解説」を行った。ファシリテーションは決して特別なものではなく、ちょっとした工夫は誰でも意識すればできる。そのことを体感したメンバーからは、「これまでなかなか話せなかったことが話せて、さらに実際の方向性も見えてきた。これがファシリテーションの力なんですな」との感想が寄せられた。

### ファシリテーションを知る・学ぶ —住民が「主体」になるといふこと

その後、「つなごろう南相馬」のメンバー間で「多くの人がファシリテーションを学べば、南相馬はもっとよくなるのでは」という話を持ち上がり、今度は「ファシリテーションの講座を開催してほしい」との依頼がF A Jに寄せられた。徳田と鈴木、プロセスの記録係として飯島邦子（後に災害復興支援室メンバーとなる）と会員一名が同行することとなった。

10月14日、南相馬市市民活動サポートセンターで開催された講座には、「つなごろう南相馬」のメンバーを始めとする南相馬市民だけでなく、飯館村など近隣地域の復興の担い手、埼玉県など遠方から支援に入っている人々など、老若男女13名

※ OARR：Outcome（目指す状態）、Agenda（スケジュール）、Role（その場にいる人たちの役割）、Rule（グラウンドルール）の略

が参加した。集まった参加者のニーズを汲み取りながら、徳田は講座の進め方を考えた。まずは身近な体験をベースに考えてもらえるよう、「私が経験したダメな会議」を挙げてもらい、それをある程度分類した上で、「では、どうすればそれを改善できるのか」を自分たち自身で考えて、最終的には「自分なりのコツ」を見つけて持ち帰ってもらえるような流れとした。

「見て、このチラシ！ みんなで作ったのよ。」後日、別件で福島市内を訪れた徳田と飯島は、高橋さんから「ふくしま会議2011バスツアー」と記された一枚の紙を手渡された。それは、10月4日の話し合いで生まれたアイデアを、10月14日の講座に参加したメンバーが、その後自主的に集まって具体化した企画のチラシだった。「こういうこともできるのではないか」とさまざまなアイデアが付け加えられ、「これだったら、この人にお願したい」などとそれぞれが地域の人に声をかけて、厚みを増していったとのこと。わずかな数日の間に、「もっと多くの南相馬の人たちに関わってほしい」という思いが実を結んだのだ。

さらに数日後、講座の参加者から「南相馬未来へのダイアログ」という企画を実施するための支援依頼がF A Jに寄せられた。それは、南相馬の人々がダイアログ（対話）を続けながら「未来

のありたい姿を描き、新たな社会を目指して行動していく」という連続企画で、翌2012年の2月には、それまでのダイアログの集大成として、大勢のゲストを招いて実施する大きなイベントも予定されていた。すでに実行委員会のメンバーは決まっており、数多くの団体が関わっていた。支援依頼の内容は、「各回のダイアログをファシリテーションしながら、2月のイベントの企画をつくり上げていくプロセス全体を支援してほしい」というものだった。

2011年の11月、ダイアログの第一回目の支援のために、鈴木と飯島が南相馬に入り、実行委員会の中心メンバーと打ち合わせを行った。打ち合わせといっても居酒屋である。鈴木は共に呑み語らいながら「どのような思いでこの場をつくろうとしているのか」を確認していく。飯島はメンバーが語る全ての言葉を書き出す。終わりのころには、飲み屋の畳の上にA4用紙が広がっていた。「震災をきっかけにして時代は変わっていく。単に元に戻すのではなく、新しいものをつくっていききたい。そのための新しい発想を、若い人を中心に紡いでいきたい。鹿島、原町、小高といった枠を超えて、そういう風を吹かせるきっかけとなる場としたい」。メンバーの一人、須藤栄治さんが語る熱い想いに、そこにいる人々の心が動いていく。そして、この打ち合わせで、「明日の最初

のコメントは須藤さんから発してもらおう」と決めた。

このような事前の打ち合わせは、現場での支援において非常に重要な位置を占めるため、常に意識して実施している。たとえば懇親の場であっても、グラフィックをしながら情報収集を行い、当日のO A R Rを確認する。参加するメンバーの役割を明確にしたり、グラドルールと一緒に考えてもらったりするので。特にこのダイアログは連続して行われることになっていたので、今後、災害復興支援室の誰が担当することになって、共有しやすい枠組みを意識しつつの打ち合わせとなった。また、回によっては参加者数が大きく変動するなどの不確定要素が多かったため、そのような場合の対応策についても、丁寧に相談をした。

鈴木と飯島には、「このような一連のプロセスを通して、地元の運営メンバーにファシリテーションの意味や効果を感じてほしい」という思いがあった。深



夜の居酒屋で何枚ものコピー用紙にグラフィックをする姿は、多少驚きを持って受け止められたが、関わっている人々の思いを受け止め、共有しようという誠実な姿勢が、相互の信頼関係につながっていた。

翌日、11月14日の初回のダイアログでは、鈴木がファシリテーターを、飯島がグラフィッカーを担当した。会議の進行に外部の人が関わることに違和感を持つ人もいるかもしれないと考え、冒頭で「つながろう南相馬」のメンバーから2人の役割を説明していただき、理解を得るようにした。

初回のアウトカム（目指す状態）は、「思いが共有でき、それぞれの関わり方がイメージでき、2月に実施するイベントの企画書ができそうになっている状態」とした。その上で、南相馬の未来を描きたいという思い、南相馬から世界に発信したいという思いなど、それぞれの人の思いを語ってもらいながら、「イベントで何をやりたいか」を話し合った。その中から、「南相馬の花である桜の五片の花びらのイメージを重ねて、五つのテーマでダイアログを企画しよう」というアイデアが生まれた。参加者全員が「自分たちの思いが凝縮されたものだ」と感じられるものだったため、最後は「私はそこにどう関わるか」という宣言をもらうこととした。そして、2月のイベントは「南相馬ダイアログフェスティバル〜みんな

で未来の対話をしよう〜」と名付けられ、その開催に向けての対話が積み重ねられることになった。

二回目のダイアログ（11月28日）では、須藤さんから、「復興の動きを市民の側からつくってきたい」「与えられる人から、何かを与える人になりたい」など、改めて思いが伝えられた。また、前回のアウトプットを踏まえて、「五つのテーマ」と、それぞれについての「やりたい人・かかわりたい人」を話し合った。

ダイアログには、復興を支援する様々な人たちが参加していたが、お互い初めて出会う人も多かった。この連続企画や、2月のイベントの企画については何も知らず、ただ純粋に「現状の暮らしの中で感じる悩みや不安を誰かに話したい」という思いで参加している人もいた。そのような多様な人々が、思っていることを率直に話しつつ、イベント企画にも「自分ごと感」を感じてもらえるようにするために、災害復興支援室のメンバーは対話がテーマに沿って深まるように「対話の場におけるガードレール（※）」のような役割を交代で務めた。事前の打ち合わせでは、毎回「前回の振り返り」「今回話し合いたいこと」などを確認し、当日の流れを決めていった。回が進むにつれ、運営メンバーにワークショップの進め方や場



作りの方法などの技術を少しずつ伝えながら、複雑になりがちな運営面についてのアドバイスも、さりげなく行うようにしていた。

### 当事者がファシリテーターを担う — 主体性をエンパワーすること

12月19日の第三回ダイアログを終えた後、「つ

※対話の場におけるガードレール：参加者が安心して話し合えるように見守ること。  
自動車道路のガードレールに喩えている





ファシリテーター役の宮森佑治さん

ながら「南相馬」の宮森佑治さんから「四回目のダイアログでは、自分が進行役を務めたい」という声が上がった。地域のことをよく知っていて、強い愛情を持っている地元の人が主体的にファシリテーターの役割を担うことが大事であることは言うまでもない。提案を歓迎し、FAJはサポート役に徹することにした。

事前打ち合わせでは、宮森さんが作ったワークショップの進行案について相談に応じるとともに、名簿の作成や受付の設置など、それまで宮森さんが担っていた運営業務は、地域の人々で実施してもらおうよう促した。

そして当日。進行の宮森さんは、終始黒子に徹しながら全体を見守る進行をした。参加者からは「いいじゃないか、これ」という声が聞こえ、「次

回はFAJの支援なしで実施してみよう」ということが提案されるに至ったのだ。

「支援者」としては、自らのファシリテーションが「うまくいく」ことに喜びを感じるのではなく、地域でファシリテーター役を担える人が次々に育っていくことにこそ喜びがあると考えたい。時間の経過とともに、支援の仕方は変わる。この時を境に、FAJの役割は、話し合いの進め方（プログラム・デザイン）や、その場にあったファシリテーションのやり方を「ともに考える」こと、必要に応じてアドバイスをしたり、フィードバックしたりする、いわば「見守る」立場へとシフトしていったのだ。

人々の記憶から決して消えることのない2011年が過ぎ行き、迎えた2012年。2月18日・19日の両日、「南相馬ダイアログフェスティバル〜みんなで未来の対話をしよう〜」が南相馬市民文化会館（ゆめはつと）で開催された。ゲストを交えたシンポジウムや対話の場など、数多くのプログラムが生まれ、参加者は延べ約1500名にもなった。地域の人たちがやりたいうことを主体的に考え、話し合いを重ねてきた結果、参画意識が高まり、「人が人を呼ぶ」という連鎖を生んだのだろう。

地元のメンバーは、大規模なイベントの運営

と、それぞれの分科会のファシリテーター役という二重の役割を担うことになった。そこで、災害復興支援室のメンバー6名に会員5名を加え、総勢11名が前日から南相馬に入り、できる限り陰の支援をすることに決めた。

イベント当日の朝、初めて南相馬を訪れたFAJ会員メンバー数名は、「つながろう南相馬」の高村美春さんの車で、沿岸部へ向かうことにした。高村さんは、「事実をその目で見て欲しいから」と、南相馬に訪れた人をいつもこうして案内してくださる。目の前にひろがる瓦礫の山にメンバーの言葉は少ない。高村さんは運転をしながら淡々と事実を語っていく。同行していた災害復興支援室の飯島は、自分にできることの小ささを痛感しつつも、この後のイベントの成功のために可能な限り最善を尽くそうと思うのだった。

このイベントで、最も力を注いだのは、やはり「見える化」だった。分科会の数が多く、それぞれが準備を進めているもの、全体の状況が把握できずお互い会場のどこで何が起きているのかわからなくなることが懸念された。この状況に対応するために、分科会ごとに担当者を決め、それぞれの事前打ち合わせの場に入ることとした。そして深夜23時、ホテルの一室に集まって、当日のスケジュールや担当者の情報を付箋に書き出し、数枚の模造紙をつなげた大きな表を作成して、必要な情報が一覧できるようにした。



「南相馬ダイアログ」で使われた、情報を「見える化」したタイムスケジュール



当日はこれを楽屋に貼り出し、さらにリアルタイムで情報を更新していった。

フェスティバルではテーマ別に多くのダイアログが行われ「話してもいいんだ」と思える場を初めて経験した。「話すことで少し気分が楽になった」という声を聞くことができた。

地元のファシリテーター達も、悪戦苦闘しながらも、一所懸命に場をつくっていった。

テーマのひとつに「お父さん会議」があった。原発事故後、お母さんが小さな子どもを連れて他の土地に避難し、お父さんは仕事の都合で土地を離れることができず、家族が離れ離れに暮らしている世帯が多くあった。そのような状況において、お父さんが、これまで言葉にすることのなかった悩みや、「子ども達のために何かをやりた

い」という熱い思いを語り合い、聴き合っていた。

「話し合い」にはさまざまな形態がある。多様な意見が出やすいよう、多様な属性の方に集まってもらう形も少なくない。しかし、この時は家族の中での立場など、「近い」と感じられるお父さん同志が集う中で、子どもたちのために「遊び場を作ってあげたい」というアイデアが生まれ、多くの支持を集めた。そしてこれは後に、「みんな共和国」という取り組みとして結実することになる。

フェスティバルは盛会のうちに終了し、関わった人たちは達成感を感じているようだった。地元メンバーの一人が「この土地で、受け身の存在のままでは、自分たちが能動的にこ

とを起こした、その第一歩だった」と発言した。初めて「つながろう南相馬」をサポートした会議の記録にはこのように書いてある。「これまでは受身的なイベントが多かったが、今度はつながろう南相馬として何かをやっていく。市民を主役にしたネットワークをつくる。そして、がんばっている人たちの晴れ舞台をつくる」

あれから半年。この言葉がまさに実現したイベントとなった。

### そして、かかわりは続く

2012年3月4日。鈴木と飯島は、まだ寒さの残る南相馬を再び訪れた。フェスティバルから約三週間、FAJから提案して、「南相馬ダイアログフェスティバルの振り返り会議」を実施することになったためである。いつものように、事務局のメンバーと事前の打ち合わせでOARRを決め、アウトカムは「振り返りを通して、これからも南相馬ダイアログに関わっていかうかなと思っている状態」と設定した。そして、反省にとどめるのではなく、次に向けての前向きな場にするために、「KPT(※)」の視点をを用いることをFAJから提案した。振り返りには、FAJを含め21名が参加した。ファシリテーターの飯島はどこに付箋を貼りだそうか考えあぐねていた。会場となる「だいこんや」には適当な壁もホワイト

※ KPT: 振り返りのフレームのひとつ。Keep(よかったこと)、Problem(改善すること)、Try(あらたに試みること)の3つの視点で振り返る。「KPT」はそれぞれの頭文字

ボードもない。そこで、車座に置かれた椅子の真ん中にぽっかり空いた空間に模造紙を置き、そこに各自が書き込んだ付箋を貼り出すことにした。「せっかくなので声に出しながら貼ってくださいね」と促すと、一つひとつ被さるように参加者の言葉が重ねられ、終始、和気あいあいとした雰囲気での対話が進んだ。ダイアログからフェスティバルまでの一連のプロセスを通し、実行委員を含む参加メンバー同士の関係性が築かれていつているからこそ、充実した時間であった。

フェスティバルの後も、しばらくダイアログは継続された。FAJは、時々プログラム・デザイナーの相談にのることもあったが、基本的には一参加者として参加し、「見守り」役に徹した。

「自分たち南相馬のメンバーはダイアログに集中したい。皆が主役になりたいので、ファシリテーターをお願いしたい」

宮森さんからこのような依頼がFAJに寄せられたのは、震災から二年が経過した2013年。3月14日に東京・両国で「南相馬ダイアログ〜みんな未来への対話をしよう〜」が開催されることになった時のことだ。ファシリテーターの意味を十分に理解しているからこそその依頼と、喜んで引き受けた。

当日。最初に南相馬から参加した六名がそれぞれ

の思いを伝え、その上で、その六名が円になって「南相馬での生の会話」を行う。参加者はそれを何重にも取り囲むようにして聴いた。当日のメインファシリテーターは鈴木と飯島。グループファシリテーターは後に災害復興支援室メンバーとなる浅羽雄介を含む会員ボランティアの六名が担当した。

実はこの時、南相馬の面々とは久しぶりの再会であった。それでも、まるで旧知の仲間のようにお互いが言葉を交わすことができる。そこには、支援する／されるという関係ではない、文字通りの「人と人とのつながり」があった。お互いについても連絡できる、相談できる関係性が築かれていたのだ。

福島県南相馬市。元々、何かつながりがあった土地ではなかった。しかし継続的に訪れ、地域の人たちと「何をすることができるのか」から一緒に考え、関係を育んでいくことで、そこには確かな「縁」が生まれた。そして、そのプロセスを通じて、地域の中でファシリテーションが、あるいは対話という「文化」が、少しずつ浸透していったのだ。南相馬とFAJの二年間は、その過程を一筆ずつ塗り重ねていく日々だったのかもしれない。

2014年6月から2015年3月にかけて、FAJは再び、南相馬市市民活動サポートセン

ターでファシリテーション研修(全6回)を実施した。受講生の中には、2011年からの「南相馬ダイアログ」の参加者の姿もあった。

そう、復興は道半ばであり、まだまだファシリテーションは必要とされているのだ。

支援するとはどういうことだろうか？ ただ一つ言えることは、災害復興支援室のメンバーがファシリテーターとしてずっとそこに通い続けることではないということだ。そして、「支援とは何か」という問いは、今も問われ続けている。



東京で開催された「南相馬ダイアログ〜みんな未来への対話をしよう〜」の様子



# 支援する人たちとの関わり JCNの事例から

支援機関同士の  
ネットワーク強化

## JCNとの出会い、そして提言

「震災ボランティア・NPOと省庁の定例連絡会議」は、800以上のNPO/NGO、企業などの各種団体が加盟する全国規模の連絡組織、「東日本大震災支援全国ネットワーク（以下JCN）」が主催するもので、毎回150名前後の多様な団体が参加していた。

初回の開催は日本がまだ混乱に陥っている2011年4月7日。会場前列に各省庁の方々や関係者が並び、それに対峙するようなスクールの配置で参加者の座席が用意されていた。そして、各省庁からなされる報告や情報提供に対し、参加者が質問するというスタイルで行われた。FAJ災害復興支援室から参加した杉村は、お互いの状況を知るという意味では機能していると思いつつも、同時に「質問したい人だけが質問できる」というスタイルでは、今後行き詰ってし

まうのではないかとも感じていた。

4月19日に開催された第二回の連絡会議には鈴木と杉村が参加したが、質問したい人だけが質問し、一向に良くならない現状に不満や文句をいう人、司会の静止を振り切って延々としゃべりだす人なども出始めていた。

「これだけの支援団体が集まる連絡会議で、参加者同士が話をする場がないのはもったいない。機能するネットワークキングのために、何かできないだろうか」。そこで考えたのが、主催者であるJCNに対して、連絡会議の進め方やあり方を提案することだった。どのようにすれば参加者にとって、ひいては復興支援活動において有意義な場となるのか、またそのためにはどのように会議を設計すればよいのか。メンバー間で内容をまとめ、「話し合いの促進による復興支援のご提案」定例連絡会議を活用した「JCNの活性化」という提案資料を作成した。

5月12日、第三回の連絡会議を数時間後に控えた会場近くの喫茶店で、徳田と杉村は連絡会議を企画・運営するJCN制度チームの関口宏聡ひろあきさんに提案書を手渡した。提案の骨子は、以下のよう内容であった。

目的：省庁と団体、そして団体同士の連携・協働を促進し、課題解決や新しい取り組みの創出につなげるために、連絡会議を深い議論や意見交換ができる場に行うこと  
方策：テーマや課題ごとに分かれて話し合いができる機会を設けること、全体の状況を共有できる場を設けること、会議サイズの最適化を図ること

「政府の意向もあるので、すぐに連絡会議のスタイルを変えらるというのは難しいかもしれないが、よければ制度チームに加わってもらえないか。引き続き連絡会議をよくするために協力して

ほしい」。関口さんの回答を受け、徳田はその場で快諾した。もとより、JCNの発足直後に参加団体として名乗りを上げたのも、活動の軸の一つである「支援団体同士のネットワーク強化」に寄与できるきっかけを探ることにあつたのだ。断る理由はない。さらに、連絡会議そのものが「支援活動の対象」となれば、「被災地まで赴くことは難しいが、東京の会議であれば参加できる」という多くのFAJ会員の力を活かすことができるのではないかという考えもあった。

制度チームのミーティングには徳田・杉村・小藤が交代で参加し、板書や論点の確認などミーティング自体のサポートをしつつ、連絡会議のあり方に関する提案を行った。その結果、6月1日に開催された第四回連絡会議では、参加団体同士の交流と情報交換を目的とした意見交換の機会が設けられた。この意見交換会の運営を円滑なものとするため、FAJ災害復興支援室としてFAJ全会員に対して初めてボランティアの呼びかけを行い、五名の会員が運営をサポートした。そしてさらに、制度チームのメンバーは連絡会議の質を上げるためのミーティングを重ねた。交流だけでなく、NPOやボランティア団体から少しでも質の高い提言がなされるようにするにはどうすればよいのか。結果としてたどり着いたのは、「2種類の会議を交互に開催する」というア

イデアだった。まずはNPOやボランティアだけで集まって課題別に解決策を検討する。その上で、政府関係者を交えて提言・議論を行うようにするのだ。

7月11日、ついに提案が実を結んだ。「震災ボランティア・NPO等による提案準備会合」（通称「A会議」）が開催され、①被災地での移動、②女性・ジェンダーの観点からの支援のあり方、③災害ボランティアセンターとNPOとの連携、④被災地のニーズ吸い上げの方法、という4つのテーマで、提言に向けての検討が行われた。各テーブルには議論を促進する役割のファシリテーターと、話し合いを視覚化するグラフィッカーを

ターと、話し合いを視覚化するグラフィッカーを置いた。グラフィッカーとして参加していた飯島は、隣のテーブルのディスカッションで自分のテーブルの音が聞きとれないほどに活発になった、その会議の変化に驚いていた。飯島は前回の会議でも運営をサポートしていたのだが、その時は発言者も限られ、大きなコの字型のテーブルの真ん中に空いた空間がそこに居る人たちの心の距離を表しているようだと感じていた。しかし今回は打って変わってテーブルをくっつけての小グループでの話し合い。同じ二時間でも全く違う時間になることをあらためて実感したのだった。

開始前、参加者から「どうせ政府のアリバイづくりだろう」「やっても無駄だ」という声もある中での開催だったが、終了後には「これまでに参加した会議の中で一番有意義だった」との声も聞かれ、メインファシリテーターを務めた徳田は胸をなでおろした。

しかし一息つく間もなく、次は「震災ボランティア・NPO等と各省庁との定例会議」（通称「B会議」）である。会場のレイアウトを、中心に机を六角形（円卓型）に配して、テーマごとに関係する参加者が座るようにし、その周囲にその他の参加者が座る、フィッシュボール（※）に近いレイアウトに変更した。これまでの連絡会議とは異なり、一つひとつのテーマについてじっくりと



「震災ボランティア・NPO等と各省庁との定例会議」（通称「B会議」）の様子

※フィッシュボール：英語で金魚鉢の意味。話し合いをする人たちと観察する人たちを分けて話し合いの進め方を分析する手法。ここでは空間のレイアウトとして使っている

話し合いをすることができ、何が課題で、何が必要なのかを整理されていった。会議の後参加者のコミュニケーションは継続され、移動支援に関しては政府窓口への提言や対話が続いた。

会議を変える。プログラムを、レイアウトを、グループサイズを変える。それ自体は容易なことかもしれない。

しかしそれを、ある程度の規模の会議で実現するためには、そこにたどり着くまでの地道な提案や交渉が必要であり、何よりも関係者間で相互の



JCN 現地会議で参加者全員が輪になって話し合う様子

信頼関係を築いていくことが重要である。この後、当時は災害復興支援室サポーターだった飯島が、半年間JCN事務局会議に毎週出席し、情報交換を重ねていくことになる。

## 現地会議の支援、その変化

東京でのA会議B会議と並行して、東北三県ではJCN現地会議が行われていた。現地会議は、各県で活動している支援団体同士が連携することを目的に行われるもので、2011年5月での宮城県開催を皮切りに、これまでに合計30回以上続けられている。FAJが支援に入ったのは、同年11月の「現地会議in岩手」からである。

その時々で扱われるテーマも開催地も異なるが、構成はおおよそ、第一部がテーマに沿った話題提供者の話、第二部が話題提供者を含んだパネル討議、そして第三部は参加者同士の話し合いの場となるが多く、FAJは主にこの第三部の進行を任せられる。FAJへの支援依頼が第三部のみの場合であっても、その現地会議全体の目的や流れを踏まえて場をデザインすることが重要であるが、毎回、準備の時点からしっかりと関わり合えていたわけではなかった。

当初は、事前に進行内容を十分に把握することができず、当日の会場で場の様子を見ながら進行を組み立てていくことが多かった。また、前段の

司会進行も担当することもあったが、それはあくまでも、参加者同士の対話の時間を確保するため、という意識に基づくものであった。

こうしたJCN現地会議との関わり方は、段階を経て変化していくことになる。

2013年3月8日、午前10時。前夜池袋から乗った夜行バスを降りた災害復興支援室の尾上昌毅は、眠い目をこすりながら釜石の空を見上げた。どんよりとした曇り空が大きく広がり、一方で凜とした冷たい空気が眠気を吹き飛ばそうとしていた。

「現地会議in岩手」はすでに六回目となるが、あの日から丸二年を目前に控えた今回は、ともすれば支援が先細りしていく状況の中、復興に関わるNPOが長期的・持続的に活動していくための方策を何とか検討したいというJCN企画者の思いの込められた現地会議であった。

今回のFAJへの依頼は、第三部の参加者同士による約50分間のグループ討議「つながる」パートで、各グループに入ってファシリテーターを担うことである。

会場である釜石地区合同庁舎に入り尾上がまず行ったのは、ファシリテーターグループの打ち合わせである。今回のファシリテーターは、いわて連携復興センターからの二名とFAJ会員、そして尾上の四名である。

これからのおよそ40分間の短時間の打ち合わせで、本番の進め方に関して四名の合意が取れるのだろうか、と尾上は心配であった。

よそ者として現地に入る時、現地のファシリテーターとの打ち合わせは、今日の場合がどんなものかを知るための大切な情報源でもある。打ち合わせでは、担当する第三部のアウトカム（ゴール）を確認して紙に書き出した。「行政とつながることの意義や方法について、会の参加者が自分の思いを言葉にして出せている状態」。ここまで書いて、ファシリテーターたちが納得しているかどうか顔色を見る。本番の50分間でここまでたどり着けそうか。たどり着くまでの道のりはどう設計するのか。全員が真剣なまなざしで想像を巡らせている。

次いで尾上は、最終的に参加者に投げかけようと想定している「問い」を示した。「あなた自身は、行政とのつながり（話し合いの場）をどのようにつくっていったらよいと思いますか？」これで行けそうか、問いを投げかける側のファシリテーターが腑に落ちているかどうか。あらためて全員の顔を見回す。

40分という限られた時間が、もしも第一部・第二部の話題提供者と参加者との個別質疑応答の時間になってしまうようなことがあると、この「問い」は唐突なものとなり、ひいてはアウトカムを達成することはできなくなる。進め方には、細心

の注意が必要だ。そのため尾上は、進行のおおよそのメニューも用意し、メンバーと共有した。

現地会議では、第三部まで残る参加者の数を予測することは難しい。また、参加者のグループ分けも、機械的に分けるわけではなく、話題提供者の持ちテーマと関連してその場で参加者の希望を取るため、各グループの人数は事前予測ができない。尾上はこれまでの経験を踏まえ、参加者の人数に応じた複数の進め方をあらかじめシミュレーションしておくことをアドバイスしたところで、打ち合わせを終了した。

後は、ファシリテーターそれぞれが必要な「紙芝居」(\*)を作成するなどの準備をすることになる。

16時。いよいよ第三部への場面転換だ。グループファシリテーターは、それぞれの持ち場で場づくりをする。それを確かめ、仲間の進行を信じつつ、「まずは椅子を詰めて着席してもらおう。そこから先は、流れに沿って舵取りするだけだ」と心で呟きながら、尾上はマイクを手にした。

「あと二分で開始しますので、ご自分のテーマのグループに着席をお願いします」

グループファシリテーターは、会場にいる参加者をテーマに沿って自分のグループに迎え入れ、いよいよ第三部の対話が始まった……。

## さらなる連携へ、さらなる変化

2013年11月29日。宮城県岩沼市で開催される「第8回現地会議 in 宮城」に向かう新幹線の中。浅羽、浦山、飯島の災害復興支援室メンバーと、後にメンバーとなる加藤貴美子を含むF A J 会員ボランティア四名は、その日の進行打ち合わせを行っていた。今回の現地会議のメインテーマは「仮設後のコミュニティ形成を考える」。構成は第一部、第二部でゲスト登壇者五名からの話題提供、第三部が登壇者ごとにグループをつくり参加者と一緒に話し合うというもの。F A J は、浅羽がコーディネーター兼メインファシリテーター、浦山が全体をサポートする遊軍、残る五名が第三部のグループファシリテーターだ。

車中の打合せを進行する浅羽は緊張の面持ちだった。実は、コーディネーター兼メインファシリテーターを務めるのは、これが初めて。しかも、今回はメインテーマが時節に合っていることもあり通常より多くの参加者数が見込まれ、またゲスト登壇者の顔ぶれも多彩で内容は多岐にわたるそうだった。そんな浅羽を浦山がフォローしつつ打合せが進む。イメージをつかみ始めたメンバーから提案も出てきはじめた。

会場に到着し、JCN側スタッフとの顔合わせの後、すぐに各人は準備に取り掛かる。目的や

\*紙芝居：ファシリテーターが、インストラクションや問い（質問）を参加者に伝える際に使用する紙のこと



まだ参加者が集まる前の会場の隅でそれぞれが考える「紙芝居」を用意するグループファシリテーターたち。まさに“現場力”がものを言う



想定以上にサイズ（人数）が大きくなったグループの話し合いの様子。4人程度の小グループに分かれて話し合ってもらうなど、その場で話しやすい工夫を行った

ゴール、進め方の大枠は共有されているが、各グループでの細かい時間配分や「問い」の文言はグループファシリテーターに任されている。グループファシリテーターたちは自分が担当するグループの登壇者に挨拶を済ませるとともに流れを確認し、本番で使う「紙芝居」をつくる。現場に来て初めてわかることもあり、この限られた時間での準備は重要だ。

定刻通り現地会議がスタートした。浅羽は緊張しつつも予定通り第一部、二部を進める。参加者席の中にグループファシリテーターたちの顔が見える。登壇者がここでどのような発言をするか、それをしっかりと聞きコンテンツを把握している

のだ。それにしても、いつのまにか広い会場いっぱいまで参加者席が増設されている。これは、何名来ているのだろうか…。

そして、第三部。この日の参加者数は約150名になっていた。終盤になっても8割が残っているようだ。これまでにない、想定を超えた大人数だった。しかも、第三部は始まってみないとグループサイズがつかめない。参加者が第一部、二部を聞いて関心のあるテーマのグループをその場で決めて参加するというスタイルなのだ。

果たして、飯島が担当するグループは、最も多い、4〜50名の人数が集まっていた。グループというより、独立したひとつのイベントのようだ。

浅羽と浦山はサポートに入ろうかと逡巡したが、結局そうはしなかった。ファシリテーターは人数が多ければいいというものでもない。飯島を信頼して見守るのが結局は良い場につながると考えたのだ。飯島はグループサイズをさらに四名程度に分けることで全員が発言できるようにし、そこに登壇者が順に各グループを回るという流れをつくっていた。どうやったらその場にいる人たちが相互に話し、聴き、そして実のある時間とできるのか、そこに向けて意識を集中させているようだった。

この岩沼での現地会議は、会議の進め方や事前準備を含む「場づくり」の仕方、JCNへのFAJの支援の仕方のいずれも、大きく変化してきたことを実感する場となった。

その一つとして、JCN宮城担当の池座剛さんが、それまでのFAJとの現地会議の経験の中から、場づくりのための事前準備を重視し、FAJとJCN双方の担当者間の打ち合わせを重ねることができたことがあげられる。特に災害復興支援室として初めて支援活動全体をコーディネートする浅羽にとっては、池座さんの上京のタイミングに合わせて徳田と共に対面でのミーティングを行うことができたことは、その後プログラム案を相互に調整していく上で、とても大きな力となった。



また、通常60分程度になることが多い話し合いの時間が、75分と長めに設定され、主催者側が参加者間の話し合いを重視していることが伝わる企画となった。その甲斐あって、どのグループも活発な話し合いが続き、アンケートの結果からも参加者の満足度が高い会議となった。

ファシリテーションによる支援のプロセスは、事前と当日だけに終わらない。企画関係者が集まって「振り返り」を行い、次につなげていくことが重要である。しかし、重要性は分かっているにもかかわらず、実際にはなかなか時間が確保できないものだ。多忙を極めるJCNのメンバーとともに振り返りを行うことは難しく、FAJ内部のみでの実施となることも多かった。しかしこの回では、浅羽と飯島の呼びかけに応え、JCNの担当者である池座さんを交えた振り返りの時間を別日程で確保することができた。スカイプでの実施ではあったが、これまで踏み込めなかった第一部と二部へのプログラムへの関わりの道が広がった場になった。

この現地会議をひとつの転機として、JCNとFAJがこれまで以上にしっかりとタッグを組み、事前準備から振り返りまでの一貫したプロセスをとることを考え、実施することが可能となった。またこの回では、災害復興支援室内部での進め方にも変化があった。当日は参加できないメンバー

も含め全員が一連のプロセスをメーリングリスト等で共有し、情報収集、プログラム・デザイン、ボランティアの確保など、様々な役割を「できるメンバーが、できるときに」分担しながら実施していったのだ。

浅羽と浦山は、同年7月から災害復興支援室に加わったばかりだったのだが、このプロセスを経ることで、誰が担当となってもほぼ同様の質と内容の支援ができる体制が整うに至ったといえる。

現地会議のあり方や、その中でのFAJの立ち位置は、その都度変化していく。2014年8月の「現地会議in岩手」では、全体の進行を「いわて連携復興センター」が担当した。第二部の「取り組み事例の紹介」の際に、個々の事例の紹介ごとに会場の参加者同士で三名程度の小グループを作ってもらい、「登壇者の話した事例を聞いてどう思ったか」を数分で自由に話すバズセッション(※)を導入した。これによって、これまで聞き役だった参加者に、ちよっとした会話を交わす時間を作ることができた。そして、場の空気が変わり、会話が活気づいたことで、その後の質問が出やすくなるなど、会議全体の活性化に良い影響を与えた。

また、同年10月に開催された「現地会議in宮城」では、第三部のグループファシリテーターを、現地で活動する複数の団体の方々が担うこと

になったため、FAJは、各グループの成果物がレベルの揃ったものとなるようフレームワークを提供した。ファシリテーターが進め方に迷うこともなく、また終了時に全体で共有を行う際も、内容が分かりやすいと好評を得た。

ファシリテーターを担うことだけが、ファシリテーションではない。支援のあり方もまた、「型」があるわけではないのだ。

このような小さな積み重ねが、最終的には被災者、避難者、支援者へとつながっていくことを信じて、一歩ずつ進めていく以外に、できることはない。

## 広がる支援のネットワーク

「支援機関同士のネットワーク強化」を期してJCNとの協働を進めるうちに、FAJ自体にも、そのネットワークに参加する個々の団体とのつながりが得られていった。特に、現地会議と同様にJCNが継続的に開催している「広域避難者支援ミーティング」には、全国からさまざまな団体が参加する。中にはそこの話し合いの進め方に共感してくださった団体から、会議後に支援の依頼をいただくこともある。特定非営利活動法人国際協力NGOセンター(以下、JANIC)との協働もそのようなケースの一つである。

※バズセッション：少人数のグループで気軽に話す手法。“バズ”とはハチがブンブンと飛ぶ音を表す



JANICの「市民社会による支援の合同レビュー及び世界への教訓発信プロジェクト」で東北3県を訪れた初日前夜。宿泊先のホテルのロビーで深夜まで打合せが続いた

JANICは、飢餓、貧困、人権の侵害から解放された、平和で公正な地球市民社会の実現を目指して1987年に設立された、日本の国際協力NGO団体を会員とする、日本有数のネットワーク型国際協力NGOだ。2012年、JANICは、三年後に仙台市で開催される予定の世界防災会議に向け、東日本大震災の被災地での活動によって得られた知見を「合同レビュー事業検証結果報告書」として発表する計画を進めていた。その中で扱う素材の収集を、これまで支援に関わった団体に集まってもらったのワークショップ形式で行おうと考え、その進行をFAJに依頼してきた。JCN広域避難者支援ミーティングでの参加型の進め方を体験したことから、FAJの存在を知ったのだった。

災害復興支援室の浦山は、尾上、飯島とともに、東京、岩手、宮城、福島の一都三県で実施するプロジェクトにおいて、プログラム・デザイン

から現場でのファシリテーションまでのサポートを担当した。このプロジェクトの結果は他の膨大なデータとともに分析され、約二年後の2014年5月に『東日本大震災 市民社会による支援活動・合同レビュー事業検証結果報告書』国際協力NGOの視点から』として発行された。

この年、浦山は他にも国際NGOと新しいつながりの支援案件を担当した。

特定非営利活動法人ADRA Japan (Adventist Development and Relief Agency Japan)は、キリスト教精神をベースに、世界各国で活動している国際NGOで、静岡県で開催された「災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練」がFAJとの最初の接点であった。ADRAは被災地のさまざまな市町村で支援を行い、福島県双葉町から各地に避難している中学生、高校生の集いを双葉町とともに計画していた。この件のコーディネーターとなった浦山は、ADRAスタッフはもちろん、双葉町の方とも何度も打合せを重ねた。その中で双葉町の方が口にした「同窓会みたいにしたい」という言葉にヒントを得て、久しぶりに再会したみんながワイワイと楽しめる場となるワークショップをデザインした。浦山がファシリテーターとして常に大切にしているのは、主催者と何度も話すことで実施の背景にある「思」や「意図」を聞き出し、そこから場づくりを



徐々に顔を見ることができた双葉町の高校生たち。会場に貼り出された松の木に思いの言葉を残していった

することである。そのスタイルが、この案件でも遺憾なく発揮されていた。

当日は、浦山がメインファシリテーターを務め、浅羽、飯島、尾上、杉村の災害復興支援室のメンバーとサポートメンバー二名に加え、以前、岩手・宮城・福島の三県で災害復興支援室が主催したファシリテーション講座等で関わりのあった、「Link with ふくしま（通称リンクふく）」の若者にもグループファシリテーターとして加わってもらおうようコーディネーターとして「リンクふく」は福島出身者の団体で、この若者たちは、発災当時大学生だった。同じ福島出身の若者が関わることで、双葉町の若者にとって一つのモデルとなればという隠れたねらいもあってのことだ。果たして、当日は、避難先から久しぶりに集まった同級生たちが、まさに同窓会のように賑やかに話し合う場となった。

ネットワークが広がるに伴い、協働する団体も増えていき、支援も厚みが増す。その流れは、今でも続いている。

# 連携した皆さんからの メッセージ

これまで多くの個人、団体の皆さんと一緒に活動をさせていただきました。  
それぞれ専門分野、役割が違うからこそ、力を合わせて  
取り組ませていただけたと考えています。  
各方面の皆さんからファシリテーションで支援を続けている私たちに  
メッセージをいただきましたが、他にも連携した皆さまに、  
この場を借りてお礼申し上げます。

※五十音順にて掲載させていただいています



会田 有紀様

特定非営利活動法人  
ADRA Japan  
東日本事業担当

自由は福島県双葉町青年育成町民会議主催の「双葉町青年の集い」（2013年8月10日）のお手伝いをさせていただきました。この集いは、東日本大震災と原発事故により、双葉町から各地に避難している町の若者（高校生）が震災後初めて集い、それぞれの現状や町への想い、将来の夢について自由に語り合いながら、絆を強めることが目的でした。また、参加した若者が再会を楽しみ、笑顔で「また会おう」となればとの想いもありました。災害復興支援室の皆さまには、準備段階から、一緒にプログラムを組み立て、当日も、雰囲気作りから、参加者が活発に意見を出し合うためのサポートまで全面的にご協力いただきました。集いの後、参加者が清々しい表情で名残り惜しそうに、会場を去るのが印象的でした。当日の若者の意見は町に引き継がれています。今後も福島県の人々が自らの力で復興していくために、災害復興支援室の方々のサポートが大きくなると確信しています。

## 再会した双葉町の若者が 自由に語り合うために



栗田 暢之様

東日本大震災支援  
全国ネットワーク  
(JCN)  
代表世話人

二〇年前にもこれがあつたら…  
あの日あの時、誰もが何かしなければと考えるはずです。自身も無い知恵を絞りに絞って、朋友らと腹をくくり、民間セクターの全国ネットワークを立ち上げました。震災当初は、その協議の場を持つたびに、会場には溢れんばかりのボランティア・NPOらが集いました。しかし、当然ながら被災地の課題は山積で、いったい何から手を付ければいいのか、混沌としていました。そんな時、その進行役を買って出てくれたのが、貴協会でありました。全国から駆けつけていただいた先鋭も、「何かしたい」ときっと思われたのでしよう。みなさん気合が入っていて、協議の論点を明確にしたり、テーマごとに課題を整理したり、何より限られた時間を最大限有効活用する術を如何なく発揮していただきました。このご協力は現在も継続していただいています。改めて感謝いたしますと同時に、ますます潜在化、深刻化していく被災地の課題に、今後も一緒に向き合っていたきたいと願っています。

## FAJとの出会い

東日本大震災に端を発した福島第一原子力発電所の事故で、南相馬市は、殆どの住民が避難しました。その後、街に戻った須藤栄治、宮森佑治、高村美春、高橋美加子の4人が再会し、心の復興が大切と「つながろう南相馬」というグループを立ち上げました。しかし、やがて行き詰まりを感じ、話し合いの支援をFAJに依頼しました。ファシリテーターにより、誰もが自由に発言できる雰囲気生まれ、多様な発言から本質的なものが浮かび上がり、具体的な行動に変身してゆくプロセスを目の当たりにしたときの驚きとワクワク感が忘れられず、他団体にも呼びかけて勉強会を開きました。その結果、「南相馬ダイアログフェスティバル」という企画が生まれ、一大イベントとなりました。混乱期の南相馬で市民活動の流れを継続できたのは、ファシリテーションというスキルで一人ひとりの気持ちをゆるやかにつないでくれたFAJとの出会いがあったからと、あらためて感謝の気持ちでいっぱいです。



高橋 美加子様  
つながろう南相馬

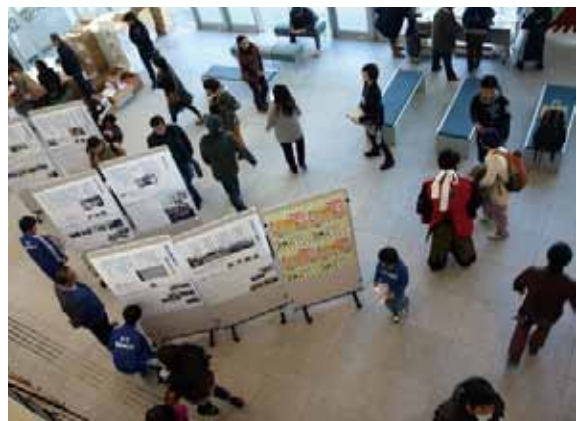
## 「市民社会による支援の合同レビュー 及び世界への教訓発信プロジェクト」 緊急人道支援と 参加型ファシリテーション

標記事業は構想から出版まで2年以上かかった。その皮切りとなる東京と東北三県での重要な参加型ワークショップの企画からファシリテーションまでをFAJさんに担って頂いた。ご協力に深く御礼申し上げます。

FAJさんをお願いした理由は、ファシリテーションのプロであるだけでなく、東北の現場に關わってきた「外部当事者」である点が大きかった。国際協力の現場では事業評価は当たり前だが、個人的にはお手盛りになる内部評価には疑問を感じていたので、当事者主体の参加型評価をしっかりと行いたかったからだ。結果的に、それぞれの専門性が発揮された相乗効果は大きく、緊急人道支援の評価や検証でも専門家と当事者の協働が有効だと感じた。今後も、より良い協働ができることを願っている。



田島 誠様  
特定非営利活動法人  
(認定 NPO 法人)  
国際協力 NGO センター  
防災アドバイザー  
(FAJ との実施当時：  
震災タスクフォース  
チーフコーディネーター)



## 『震災から四年、五年目のこれから』

私が初めて「ファシリテーション」に出会ったのは、2011年10月、『南相馬ダイアログ』の運営準備委員会でした。「自分たちの思いを形にするにはどうしたらいいのか」についてファシリテーターに促され、自分が発言したことをみなさんに受け止めてもらい共感していただけたことで、「私も参加できた」と感じる事ができました。

その後、市民活動サポートセンターに入り、日々「思いを引き出す」ことの重要性を感じています。災害復興支援室の協力で2014年からファシリテーション研修や講座も開催しました。

私の住んでいる南相馬市、特に「小高区」は2016年3月に避難解除となり、住民の帰還が始まります。「まちづくり」の対話の場では、ファシリテーションが必要です。「対決」から「対話」に向かわなければ、小高のまちづくりは進みません。これからも自分の仕事を通して「対話の場」にはファシリテーターが必要であると、行政にアプローチしていきたいと思っています。



星野 良美 様

南相馬市市民活動  
サポートセンター  
復興支援事業部

## 打合せを進めるための打合せの大切さ

FAJとは、JCNの現地会議を通じて知り合う機会を得ていました。そして、2014年8月20日に広島市で発生した土砂災害の支援活動を行う方々との情報共有を行う際に、災害復興支援室のご協力をいただきました。

そこでは、打合せを進めるための打合せの重要性を感じることができたことが印象に残っています。災害支援というと、ボランティアセンターの運営や、体力を要する活動のイメージがあります。FAJには、打合せの進行の支援をご協力いただき、限られた時間を有効の中で目的を達成するための「仕込み」に十分な時間を割いて打合せに臨むことで、目的の達成度合いが格段に上がることを学ばせていただきました。

このようにFAJの活動が東日本大震災に限定せず、国内災害の対応にも尽力してくださっていることは、我々現場で活動する者にとっては、とても心強い仲間を得た気持ちであります。今後ともよろしく願います。



松山 文紀 様

震災がつなぐ  
全国ネットワーク  
事務局長

## 実践事例から学ぶ ファシリテーションスキル

気仙沼市大谷地区では、昨年地域の承認を得て、若い世代を中心とするまちづくり協議会「大谷里海づくり検討委員会」が結成されました。現在震災により被害を受けた大谷海岸周辺の整備計画において、道の駅の移設や防潮堤の計画、海水浴場の再生に関する合意形成を行っています。手探りで行う合意形成の中、FAJの方々からは東北イベントでの話題提供の機会をいただき、私は被災地で活動する様々な方と知り合うことができました。肌感覚で進める自分の活動とは違い、そこにはしっかりとした手法をもって物事を進め形にしている活動がありました。ファシリテーションスキルを様々な形で実践されている方々の活動は刺激的で、自分の合意形成の活動にもとても参考になりました。できればこれからも実践的なファシリテーションスキルを学ぶ機会があれば是非参加させていただき、自分もスキルアップしていきたいと思っています。



三浦 友幸 様

大谷里海づくり  
検討委員会  
事務局

## まちづくりのパーツを見つける

震災後2年目、様々な会議や説明会が開催されている時期のことでした。住民が発言・提案していく事にむずかしさを感じている住民は多かったように思います。震災後の地域を元気に、地域の資源を活かす人材やその方法を一緒に考える機会としての「ひよっこりひよたん塾（以下、塾）」を日本ファシリテーション協会にサポートしていただきました。

塾では、自分たちの地域を知る機会を地域住民と町外の人々が共に学び、気づきを自然と引き出すような「場」を作ってきました。そこで聞かれる様々なアイディアは、新たなまちづくりへのヒントであり、地域資源を再認識する仕組みのパーツともいえると思います。これらのパーツを組み合わせることで、新たな魅力を発見することもあればありました。

これからも、地域が魅力的に元気になる「場」を作っていきたいと思っています。



元持 幸子 様

特定非営利活動法人  
つどい

## ファシリテーターと連携した 取組みについて

今般の東日本大震災での避難者の方に対する中長期的な支援に関し、支援活動に携わる関係者が情報を共有し、相互に連携・協働しながら避難者のニーズにきめ細やかに対応した支援の実施に寄与することを目的として、やまがた避難者協働支援ネットワークを設立し、会員の取組みを支援しています。

本ネットワークの取組みの一つとして、会員間の情報を共有し、相互に連携・協働を進めるため、意見交換会を実施しています。平成26年度は、グループワークにおける進行をスムーズに行い、より多くの参加者の意見を引き出すことで内容の充実した意見交換となることを狙いとして、進行を日本ファシリテーション協会のファシリテーターの方々に依頼しました。その結果、参加者アンケートでは、約9割から満足したとの回答があり、次回もファシリテーターの配置を継続してほしいとの声が寄せられ、企画した意図を達成できました。今後もファシリテーターの方々と連携しながら、本ネットワークの取組みの充実に努めてまいります。

山形県環境エネルギー部  
危機管理・  
くらし安心局危機管理課復興・  
避難者支援室 様



# ファシリテーションで災害復興を 支援するということ

東日本大震災の発災以来、今も継続しているファシリテーションによる復興支援。  
この、NPO 法人として初めての経験から、私たち、日本ファシリテーション協会は何を学んだのか。  
そして今後、どのような展開が想定できるのか——。  
約4年間の自分たちの活動を振り返ると共に、今後の災害に備えて、  
一緒に考えてみたいと思います。

## なぜ復興支援に 取り組んだのか、 なぜ2つの切り口だったのか ソーシャルワークに学びながら

会員一人ひとりが培ったファシリテーションのスキルとところを、「人と人が響きあう社会づくり」のために、いかに開いていくか——。2003年に設立した特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会（FAJ）は、そのための取り組みとして、「現場に出よう！」（2007年度）、「現場をつくろう！」（2008年度）、「現場をつなごう！」（2009年度）というキャッチフレーズに象徴される、さまざまな事業を行ってきた。

そして2010年度、その積み重ねの上に、いよいよ「会員個々人」ではなく「法人」が主語となるような取り組みを模索していたところに、まさに「降りかかってきた」現場が、地震・津波・原発事故の複合大災害だったのだ。

その「模索」の段階——すなわち震

# ファシリテーションによる 災害復興支援 その展開と考察

2011年3月11日以来、私たち日本ファシリテーション協会は、手探りをしながら、自分たちの力であるファシリテーションを活かした復興支援に取り組んできました。

ここでは、この約4年半における活動を振り返り、あらためて、その意味するところを考察し、今後も継続すべきことや挑戦すべき課題などをまとめてみました。

災前、組織としてのファシリテーションを通じた社会づくりへの具体的なアクションを検討していた段階——において、私たちは一つの想定を有していた。それは、ファシリテーションを通じて社会的な課題と向き合っていく際には、「困難に直面する人々に対する

直接的なかわり」と「支援者同士のネットワーキングなど間接的なかわり」の2つの位相があり、その両面を意識する必要があるだろう、というものである。

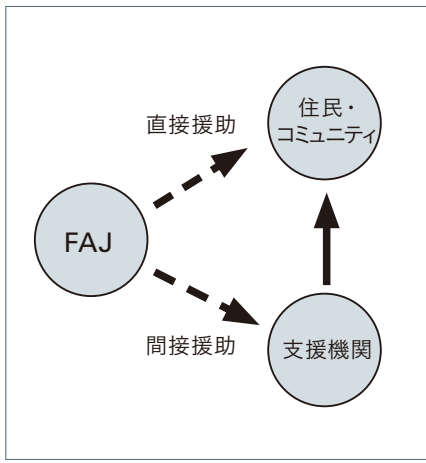
言うまでもなくこれは、ソーシャルワークにおける直接援助（ケースワ





ク、グループワーク」と間接援助（コミュニティワーク等）という切り口がベースとなっていて、この想定があったからこそ、災害復興支援室の設置にあたっては、「地域コミュニティの再構築・住民主体の復興支援」および「支援機関同士のネットワーク強化」という2つの柱を明確に打ち出し、活動の方針を定めることができたのだろう。

そのうちの後者、「支援機関同士のネットワーク強化」については、遠藤・鈴木・徳田のいずれも、中間支援団体の理事を務めるなど、いくつかの手掛かりがあった。また、3月30日に設立された東日本大震災支援全国ネット



トワーク（JCN）においても、何らかの役割を果たすことができるだろうという見通しがあった。一方で前者、すなわち「地域コミュニティの再構築・住民主体の復興支援」については、旗は掲げたものの、当初は手掛かりが何もなく、見通しもない状態であった。

多くのNPO・NGOは、「何らかの判断基準に従って、特定の地域に焦点を絞り、場合によってはスタッフの生活拠点をそこに移して、支援活動を行う」という方法を採用。しかし私たちは、その方法を採用することはできなかった。最初の手掛かりとなる人的なつながりがなかったというのも大きな要因の一つではあるが、何よりもFAJの組織運営上の特異性が影響した。FAJは、その規模に反して、給与や報酬を法人から得る専従の職員を置いていないのだ。災害復興支援室のメンバーも皆、他に本業を抱えており、「できるときに、できることを、できる範囲で」というボランティアな活動を超えることは困難であった。そのため、必然的に別のアプローチが求められることとなった。

## 地域コミュニティの再構築・

### 住民主体の復興支援に

#### どう取り組み、

#### どう展開したのか

#### 「抑制的なスタンス」とともに

特定の地域に太い絆があるわけではない、そして「毎日が復興支援活動」という体制を採用し得ない私たちは、必然的に、細い糸を手繰るような歩み方を強いられる。ふとしたことで、たまたまご縁をいただいた地域にお伺いし、都合が許す範囲で、何度か通わせていただく——という形態である。そして、当然のことながら、そこには必ずしも「ファシリテーション」というものに対する明確なニーズがあるわけではない。となればまずは、活動において、「それがファシリテーションであるか否か」よりも、「その時、その場で、必要とされているか否か」「地域コミュニティの再構築・住民主体の復興支援につながるか否か」の方が重要な判断基準となる。

とはいえもちろん、個人ボランティアとして赴いているわけではない。す

べての言動は、あくまでも法人、それもファシリテーションを冠した法人の活動の一環として行われるものとなる。しかしもとより、ファシリテーションは「振りかざす」ものではないだろう。特に当初は、抑制的なスタンスが求められていた。「ことさらにファシリテーションする」という行動ではなく、「ファシリテーションとともにある」という姿勢が重要であったといえる。

その一方で、最終的にかかわりが継続的なものとなったのは、求めに応じて「ファシリテーション講座」を開催することからスタートした地域であった。本報告書で紹介している、福島県南相馬市である。すでに記している通り、当初は「ファシリテーション講座の講師」や「ダイアログにおけるファシリテーター」といった形で支援活動は始まった。ファシリテーションを通じた復興支援という点では、まさに「ど真ん中」からのスタートである。

しかしその後、FAJのメンバーは徐々に後景に退いていく。「イベントの実施支援者」「ワークショップの見

守り役」プログラムの助言者」といった形で、時の経過とともに、地域の人々が中心を担うというスタンスへと移行していったのだ。これは、主体性を育むことを旨とする「ファシリテーション」というものの本質を表しているようにも思える。

その語義からしても、ファシリテーションは必ずしも「前に立つ」ことをみを指すわけではない。「並び歩く」ことや「後ろから見守る」こともまた、ファシリテーションである。その意味では、抑制的なスタンスは、「関係性を築くまでの間」のみならず、「ファシリテーターとして認知された後」であって必要なものなのだろう。

ファシリテーションに限らないことだが、「支援」というものを考える際には、「へでできること」を押し付けること——極言すれば、自分たちのスキルやノウハウの発揮の場と捉えること——は言語道断であろう。今回の震災ボランティアにおいても、問題となるケースが散見されたことは事実である。だが、その一方で、「へでできること」を明確にすること」は必要である。そ

れに意義や価値を見出す人がいて、はじめて支援は可能となるのであり、それが最もよく機能したのが、南相馬のケースであったといえる。

## 支援機関同士のネットワーク強化にどう取り組み、どう展開したのか メンバーシップから パートナーシップへ

一方で、手掛かりも見通しも有していた「支援機関同士のネットワーク強化」においては、JCNの参加団体として、早い時期に「へでできること」を提言という形で明確に打ち出した。これも本報告書で紹介している通りである。

JCNのようなネットワーク組織においては、個々の参加団体が、それぞれ「活動地域」と「専門領域」の掛け算によって、自らの立ち位置を明確に示すことこそが、ネットワークへの貢献の第一歩となる。連携も協働も、まずはそこから始まるのだ。その意味において、FAJが「へでできること」を

提言として明確に示したのは、「メンバーシップの発揮」であったといえるだろう。そして、「震災ボランティア・NPO等による提案準備会合」（A会議）や「震災ボランティア・NPO等と各県庁との定例会議」（B会議）において、ある程度の意義や価値を認められたからこそ、その後の「現地会議」や「広域避難者支援ミーティング」の支援へとつながっていったのだと思われる。

しかし当初、現地会議や広域避難者支援ミーティングにおいては、「会議の進行」イコール「シナリオ通りに進めていく」司会者」的なポジションを期待されることも多く、また、「横のつながりづくり」イコール「(名刺交換などを中心とする)交流会」というイメージも抱かれがちであったことは事実である。これらは、ファシリテーションに対する誤解、あるいは理解の矮小化を招いてしまうことと紙一重であった。

この時期は、正直なところ、ジレンマを抱えながらの活動であった。「ファシリテーションを看板に掲げているが

ら、その言動がファシリテーションから離れていく」というのは、先の「抑制的なスタンス」とはまったく異なる。それでも、まずは「FAJに依頼すれば、混乱もなく時間通りに終えることができる」という主催者側からの、そして「短い時間ながらも、つながるきっかけが得られる交流の時間を確保してくれている」という参加者側からの信頼感を醸成するためには、必要な時期だったのだろう。

やがて、現場も「情報を交換してつながりをつくること」が求められる時期が過ぎ、「つながりの中で知恵を創出すること」が求められるようになるとともに、ファシリテーションの機能がますます重要になっていった。FAJの役割も、そのようなプログラム——集いあい、問いあい、語りあい、聴きあうなかで、(異なり)の中から(豊かさ)を紡ぎ出していく、ワークショップ的な場のデザイン——を提案・実施することへと移っていき、専門性が評価されるようになっていった。

そして最終的には、「ともに企画を

つくる」ところから「ふりかえり、次につながる」というところまで活動のレンジが広がっていった。これは、FAJのJCNとの関係が、ネットワーク参加団体としての「メンバーシップ」から、ネットワークとの「パートナーシップ」へと変容していったということであるといえる。これはまさに、ファシリテーションを組織として掲げることのインターメディアリー性、すなわち「中間支援団体としてのFAJ」の可能性を拓いたものであるといえるだろう。

## 「ファシリテーションによる

復興支援」には、

何が求められるのか

～ファシリテーションの

ファシリテーションからの広がり

そもそも、ファシリテーションとは何か。そもそも、支援とは何か——。この間、常に自問自答を強いられたのが、これらの問いである。

童謡の「すずめの学校」と「めだかの学校」が対比されることがあるが、

あらゆる支援がそうであるように、「歌いたくない人に、指揮棒を振って歌わせる」ようなかわり方は厳に慎むべきであろう。「歌いたい人が歌えるように、伴奏する」ことが求められるのであり、さらにいえば「自分たちが歌い、それを見ていた人が歌いたくなって、いつの間にか一緒に歌っている」というようなあり方こそが望ましいのかもしれない。現に、南相馬でもJCNでも、「FAJのメンバー同士での話しあいの仕方に興味を持つ人が現れる」というのが、かわり方の変化のターニングポイントとなっていた。

そのためには、「どんな曲でも演奏できる、歌える」というポテンシャルが必要不可欠である。「キーやテンポを自在に変えることができる」だけでなく、「その場にふさわしい選曲やアレンジができる」ことも求められる。つまり、「会議のファシリテーションしかできない」「対話のファシリテーションしかできない」ということでは機能せず、さらには「狭義のファシリテーション（場のホールド）しかでき

ず、プログラム・デザインやプロセス・デザイン、コーディネートはできない」ということでも機能しない。ファシリテーションの力を、同心円状に広げていく必要があるだろう。

また、「ファシリテーションはコンテツではなくプロセスを扱う」というのが、コンテツに関する最低限の理解がなければ、参加者の信頼を得られず、プロセスを扱うことすらできなくなってしまうこともある。「地域コミュニティの再構築・住民主体の復興支援」においては、風土（地理的・歴史的・文化的背景）に関する理解であり、「支援機関同士のネットワーク強化」では、災害対応や福祉政策、市民活動やまちづくりに関する理解である。「教養の幅を広げる」というと陳腐だが、ファシリテーションを起点に、自身が「自分事」として感じ、考えることができる領域を広げていく不断の取り組みが必要である。

だからこそ、ファシリテーションに関心を抱く人々には、「さまざまなスタイルの話しあいでファシリテーションを実践し、現場対応力を高めるこ

と」はもちろんのこと、「自らの地域において役員としてならんかの団体の運営を担うこと」をおすすめしたい。「活動すること」を知らずして、真に「活動を支援すること」はできないのだから。

復興支援に限らず、地域や社会におけるさまざまな課題を解決し、未来を創造していくために、ファシリテーションとともにできることは、まだまだたくさんある。



# 1

## 緊急時あなたは「今ここ」の場面で、 どう向き合えるでしょうか

### 質問

日曜の昼下がりの14時、自宅でああなたは震度7の激震にあいました。さて、その直後、どう行動しますか？ 自分の一日を想像してみましょう。また、まわりではどんな混乱が起こる可能性があるか想像してみましょう。

発災後は、まず自分の生命を守らなければなりません。そして、周りの人や交通・情報が混乱し普段置かれたことのない状況に遭遇することになります。そんな中、周囲の人たちと協力して困難を乗り越えなければなりません。熟慮する時間がなく即断しなくてはならない場合もあります。だからこそ、普段の自分の行動が無意識に現れやすくなります。この時、私たちは、被災した一人ひとりの力を引き出し、難局を乗り越えるために促進的市民としてどのように振る舞うことができるでしょうか。ファシリテーションを学び・実践する私たちがどう行動できるのか考えてみましょう。

### アイデア記入欄

### 参考ワード

安否確認 3日間 7日間  
避難所 在宅避難 様々な不足

## 発災——、その時、あなたは？

## ファシリテーションという

## 視点から考える

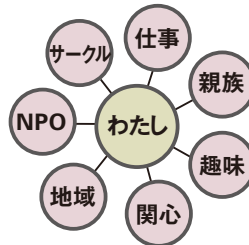
# 2

## コミュニティの数だけ安否確認や 支え合いができる可能性があります

### 質問

あなたが関わっている組織やグループを数えてみましょう。

### アイデア記入欄



発災後の安否確認は、家族や友人を通じてという場面が多くなりますが、実は様々な目的のグループ・組織に属していると、そのつながりも貴重な助け合いの場になります。いくつものサークルや円が重なることが、孤立する人を少なくすることに繋がってくるのです。そして、人が集う場には、必ずファシリテーションが息づいてくるはずです。

### 復興で核になる分野やテーマ 15

- 〈暮らし、生きがい、健康〉
  - 第1章 暮らしと生きがい
  - 第2章 健康づくり
  - 第3章 地域包括ケアと地域づくり
  - 第4章 親子のたまり場づくり、子ども・若者の居場所づくり
  - 第5章 ところの回復と生活支援
- 〈住まい〉
  - 第6章 今の住まい
  - 第7章 恒久住宅への移行
  - 第8章 広域避難者への支援  
福島固有の課題
- 〈しごと〉
  - 第9章 農林水産業の復興
  - 第10章 新しい仕事づくり
- 〈まち〉
  - 第11章 地域商業とまちづくり
  - 第12章 まちづくりの仕組み
  - 第13章 まちづくりの担い手としての  
若者・子ども
- 〈学びと協働〉
  - 第14章 学習と実践活動
  - 第15章 民間と行政の協働

大きな自然災害が発生した時、

私たちは、ひとりの生活者として、コミュニティの二員として、

あるいは企業や団体の二員として、どのような知識を持って、

どのように行動すれば、より被害を少なくできるのでしょうか。

ここでは、これまでのファシリテーションによる復興支援の経験から

わかってきたことをもとに、特にファシリテーションという視点で

その対応を一緒に考えてみます。

### 3 震災時の人の心と体の特性を把握しよう

#### 質問

震災後、人間の心や体はどう変化すると思いますか？  
想像してみましょう。

震災では、それぞれが過酷な体験をし、その後も厳しい環境が被災者を待ち受けています。人の生死の場面や怪我。財産や大切なモノを失うこともあります。そのことで対立や分断が生まれたりもします。また、経済状況の悪化から生活困窮に陥る人も増えてきます。そんな時に私たち人間の心や体がどういう状態になりやすいかをあらかじめ知っておくことが大切です。また、反応が表面に出やすい人、出にくい人、状況によって反応する人などもあります。他者理解・人間理解、働きかけ方を工夫するヒントにしてください。

アイデア記入欄

#### 時間経過と被災者の反応

反応 / 時期	急性期:発災直後から数日	反応期:1～6週間	修復期:1ヶ月～半年
身体	心拍数の増加 呼吸が速くなる 血圧の上昇 発汗や震え めまいや失神	頭痛 腰痛 疲労の蓄積 悪夢・睡眠障害	反応期と同じだが、徐々に強度が減じていく
思考	合理的思考の困難さ 思考が狭くなる 集中力の低下 記憶力の低下 判断能力の低下	自分の置かれた辛い状況がわかってくる	徐々に自立的な考えができるようになってくる
感情	茫然自失 恐怖感 不安感 悲しみ 怒り	悲しみと辛さ 恐怖がしばしばよみがえる 抑鬱感、喪失感 罪悪感 気分の高揚	悲しみ 淋しさ 不安
行動	いらいらする 落ち着きがなくなる 硬直的になる 非難がましくなる コミュニケーション能力が低下する	被災現場に戻ることを怖れる アルコール摂取量が増加する	被災現場に近づくことを避ける
主な特徴	闘争・逃走反応	抑えてきた感情が湧きだしてくる	日常生活や将来について考えられるようになるが災害の記憶がよみがえり辛い思いをする

## 1回数時間の話し合いから 数年単位に渡るプロセスを考えてみよう

### 質問

被災地ではどんな時期に  
どんな話し合いが必要に  
なってくると思いますか？

復興は、まさにプロセスそのもので  
す。1回ずつの話し合いや対話の場、  
共感や納得、合意形成があり、1年、  
3年、10年、20年と続きます。ですか  
ら、この複数年のプロセスのデザイン  
を意識することが大事です。さらには、  
この復興プロセスでどんな利害関係者  
(ステークホルダー)が存在しているか  
を知ることでも重要です。異なる組織や  
文化を持つ人たちが集まり何かを進め  
る場合は、協働をファシリテーションす  
る役割が重要になります。

### アイデア記入欄

### 復興まちづくりのための 合意形成プロセス

- ステップ1 協議の進め方等について了解を得る
- ステップ2 復興計画に揚げられた復興方針を説明する
- ステップ3 被災者とともに復興方針を確定する
- ステップ4 まちづくりに対する被災者の希望や意見を把握する
- ステップ5 被災者とともに「まちづくりの基本方針」を定める
- ステップ6 住まいの再建に要する概算費用を提示する
- ステップ7 住まいの再建方法を選択してもらう
- ステップ8 まちづくり計画案を作成して被災者と協議する
- ステップ9 協議結果を反映してまちづくり計画案を修正する
- ステップ10 協議と修正を繰り返してまちづくり計画を完成する

出典：「合意形成ガイドンス：被災自治体向け」  
国土交通省都市局・住宅局

## ファシリテーション、ファシリテーター という言葉、存在への反応を知ろう

### 質問

被災地で、ファシリテーター  
シオン、ファシリテーター  
という言葉の認知度はどの  
くらいあると思いますか？

震災後、被災地では「ファシリテーターシオン」という言葉をはじめ聞いて「ファシリテーターをはじめ見た」という声がありました。さまざまな支援団体が多様なワークショップを被災地で  
行っていたからです。  
そんな中、ファシリテーターへの疑問や不満の声を聞く機会がありましたので紹介します。このような声からその人々の背景を知り、それらを踏まえてどう現場で働きかけるか考えてみて下さい。

### アイデア記入欄

### 被災地でのファシリテーターに 関わる声

- ファシリテーターって何？  
わかりやすい役割などの説明がなかった。
- 使っている言葉がカタカナ語だったり、はじめて聞くわからない言葉だらけだった。
- いつも「ふせん」に書かされる。  
書くのは苦手だから参加したくない。
- ワークショップをやりっぱなしで、その後はどうつながるのかわからない。
- 震災前の経過や地域の特性を知らない。
- 外部からファシリテーターがやってくるが、地元のファシリテーターを育てたい。

被災地・復興のプロセスイメージ

	発災	緊急期	生活再建期	
			前期	後期
被災者	避難	仮設住宅	自力再建、災害公営住宅など	新住居での基盤づくり
	避難所	みなし仮設住宅	再建の模索、健康状態の悪化、家族形態の変化など	
地域	避難所自主運営	仮設などでの繋がりがづくり	助け合い活動1	助け合い活動2
		新たなコミュニティづくり	自治活動1、仕事づくり1	自治活動2、仕事づくり2
行政	緊急対応	復興計画	復興計画の実施1	復興計画の実施2
				総合計画との連携
支援者	ボランティア			
	社協、NPO、支援団体	コンサルタント		

被災地支援、復興支援での  
ファシリテーション

被災地では、震災によって生命・財産・関係性などが予期しない形で壊れてしまいました。だからこそ、感じ方や価値観の違いが震災前より何倍も大きくなっています。これらの状況だから大事にしたいことがあります。下図の①～④はFAJが一般的な話し合いでのファシリテーターに求められるスキルとして紹介しているものです。

今回はこれらに新たに3つ加えて被災地でのファシリテーションのヒントにしたいと思います。

復興・未来に向けた  
ファシリタティブ・アクション

震災後、様々な組織のふりかえりで明らかになったのは「普段できないことは、被災時・復興時にもできない」ということです。

だからこそ、今を大事するため、それを未来につなげるため、下記の4項目を提案します。



- 1 人と人の信頼を育み一歩踏み出すために、まず小さな対話の場をつくらう。
- 2 自分の足元で日常的にじっくりとファシリテーションを実践しよう。
- 3 地域社会にあるテーマ・エリア別の様々な活動団体や組織を3つは知らう。そして、関わってみよう。
- 4 自分が関心を持つ活動以外の未知なるものに出会おう。その時の自分の行動を振り返ってみよう。

災害復興支援室では、多方面でファシリテーションを実践している、もしくは、阪神淡路大震災の復興支援の経験があるといった会員にアドバイザーとして活動を支援してもらっています。本報告書発行にあたり、コメントをご紹介させていただきます

### 「支援」から「共創」への貴重な報告

池田 隆年

本報告には、「ファシリテーションに何ができるか」という問題に真摯に向き合った生身のファシリテーターの苦心とその成果が、あますところなく語られていました。現地の被災者だけでなく多様な人々や団体が関わる災害復興の現場では、目の前の課題解決だけでなく遠い未来にまでわたる課題に目を向ける。その時、一方的な「支援」ではなく、未来に向かう心を「共に創る」という支援室メンバーの姿勢が、大きな共感を呼んだのです。

### ファシリテーションは広がる

黒田 由貴子

一連の出来事の中で注目したいのは、被災地の方々が、ファシリテーションを体験したことをきっかけに、自らもファシリテーションを学んだということ。復興とは、元に戻すのではなく、進化させることだとよくいう。今後、被災者の方々が学んだファシリテーションを実践することで、復興後のコミュニティづくりや様々な組織の運営でもファシリテーションを活かしていくことが期待できる。そんな波及効果があるのがファシリテーションの魅力だと思う。

### ファシリテーターに求められるもの

西 修

まちづくり活動はその地域の文化に依って立つものだ。合意形成にも地域なりの作法があるが、東日本の復興は多くの提案・支援活動で新たなやり方＝変化を強いているように見える。新たな文化が受容されるためには膨大なエネルギーと時間が必要だ。しかし既に新たな種は蒔かれた。新たな作法に目を輝かせた住民も一人や二人ではあるまい。それに応えるため誠実さをもって丁寧に被災地に向き合い地道に寄り添うファシリテーターが今求められている。

### きちんとやるファシリテーション

加留部 貴行

本報告の底流にあるのは、一日も早い復興をめざして効率的に「うまくやる」やり方ではなく、息の長いプロセスを面倒くさがることなく真摯に愚直に人に向き合って「きちんとやる」あり方である。あせらず、あわてず、あきらめず、じわっと寄り添う時間と空間が、塞ぎ込み抱え込む気持ちの被災者の口と心を開いて分かち合い、そこに生まれる共感を礎に真の意味で人々をつなげた。FAJ 災害復興支援室メンバーの頑固さがにじみ出てキラリと光る。

### 人々の思いとエネルギーを 前向きなカタチに

中野 民夫

難問を前に、人々は集い話し合う。思いが交錯し混乱しがちな場で、より心が通い創造的な成果が生まれるやり方があるはずだ。FAJ の復興支援は、事前の丁寧な人間関係作りや準備、本番の臨機応変な対応、そして事後のフォローを欠かさない。引き際も熟慮する。こうして地元の主体性を育み、支援者や組織同士もつなぐ。「こんな支援の仕方があるんだ！」と、ファシリテーションの本質を日本の歴史に刻み未来につなげる偉業である。

### ファシリテーターが 人と人をつなぎ直す

堀 公俊

本報告書を読み、復興支援におけるファシリテーターの本質的な役割は、人と人を「つなぎ直す」ことにあるとあらためて痛感した。人と人のつながりが一旦切れてしまったコミュニティが再生への一歩を踏み出すには、一人ひとりの秘めた思いを分かち合うところから始めないといけない。支援団体同士にしても、「復興支援」という思いは一つでも現実の話し合いになるとうまくいかない。そういう場でこそファシリテーターの真価が発揮されるのだ。



# 資料篇

---

# 災害復興支援室

# 支援活動一覽

2011年

3・27	災害復興支援室を設置
3・30	「東日本大震災支援全国ネットワーク（以下、JCN）」に参画、設立総会に出席（東京）
4・3	現地NPO等に届ける支援物資を会員から収集し、「文具レスキューパック」を15箱作成（茨城）
4・3	「被災地で付箋などを使って情報を『見える化』するためのオリジナルリーフレット」を作成（茨城）
4・7	「第1回 震災ボランティア・NPO等と各省庁との定例連絡会議」に出席（東京）
4・8～10	岩手・宮城・福島・茨城の支援団体にヒアリングを実施。災害ボランティアセンター等15団体に『話しあい・掲示用文具レスキューパック』を寄附（岩手・宮城・福島・茨城）
4・19	「第2回 震災ボランティア・NPO等と各省庁との定例連絡会議」に出席（東京）
4・20～21	岩手県内の支援団体を訪問し、情報収集と意見交換（岩手）
4・23	新日鐵釜石ラグビー部OB会の第2回ミーティングにファシリテーターとして参加。同会の復興支援プロジェクトの名称が
4・24	「スクラム釜石」と決定（東京）
4・24	「災害復興支援室」のWebページを作成
4・24	「東日本大震災復興NPO支援全国プロジェクト設立総会&支援フォーラム」に出席（東京）
4・27	「仙台市市民活動サポートセンター」に復興支援活動団体として登録（仙台）
4・28	「いわて連携復興センター」設立総会をファシリテーターとして支援（釜石）
4・28	復興イベント「やっべしかまいし」に協力団体として参加（釜石）
4・28	「スクラム釜石」新日鐵釜石ラグビー部OB会の第3回ミーティングにファシリテーターとして参加（東京）
5・02	「第1回釜石市復興まちづくりワークショップ」をグラフィックカーとして支援（釜石）
5・02	JCNの制度チームに対して会議のあり方の提言を行い、これを機に同チームのメンバーとなる。「第3回 震災ボランティア・NPO等と各省庁との定例連絡会議」に出席（東京）
5・04	ソーシャルベンチャー・パートナーズ東京が主催した「復旧から復興へ」において活動報告（東京）
5・12	JCNの制度チームに対して会議のあり方の提言を行い、これを機に同チームのメンバーとなる。「第3回 震災ボランティア・NPO等と各省庁との定例連絡会議」に出席（東京）
5・14	ソーシャルベンチャー・パートナーズ東京が主催した「復旧から復興へ」において活動報告（東京）
5・14	FAJ九州支部定例会にて活動紹介・意見交換（福岡）
5・18	山形在住のFAJ会員を対象に「被災状況、支援状況、支援室の活動に関する協力の可能性」についてヒアリング（山形）
5・22	「スクラム釜石」新日鐵釜石ラグビー部OB会の第4回ミーティングにファシリテーターとして参加（東京）
5・23	JCN制度チーム第1回ミーティングに参加（東京）
5・23	「第1回ふくしま復興塾」をファシリテーターとして支援（福島）
5・25	「JCN 現地会議 in 宮城」に参加（仙台）
5・30	JCN制度チーム第2回ミーティングに参加（東京）
6・1	「第4回 震災ボランティア・NPO等と各省庁との定例連絡会議」に出席（東京）
6・4～5	FAJ「ファシリテーションフォーラム2011」分科会にて活動紹介・話題提供（北海道）
6・4～5	FAJ「ファシリテーションフォーラム2011」にて募金活動（北海道）
6・6	JCN制度チーム第3回ミーティングに参加（東京）
6・12	「石巻市震災復興基本計画策定へ提案！市民ワークショップ」をグループファシリテーターとして支援（石巻）
6・16	JCN制度チーム第4回ミーティングに参加（東京）
6・19	「スクラム釜石」新日鐵釜石ラグビー部OB会の第5回ミーティングにファシリテーターとして参加（東京）
6・22	「第5回 震災ボランティア・NPO等と各省庁との定例連絡会議」に出席（東京）
6・24	「石巻市震災復興基本計画策定へ提案！市民ワークショップ」を支援（石巻）
6・25	FAJ東京支部定例会「復興ファシリテーション」にて活動紹介・話題提供（東京）
6・27	JCN制度チーム第5回ミーティングに参加（東京）
6・28	会員に対する情報提供依頼を発信
6・30	秋田在住のFAJ会員を対象に「被災状況、支援状況、支援室の活動に関する協力の可能性」についてヒアリング（秋田）
7・1～3	岩手・宮城の支援団体にヒアリングを実施（岩手・宮城）
7・4	JCN制度チーム第6回ミーティングに参加（東京）
7・8	FAJ「第1回活動報告・意見交換会」を実施（大阪）
7・11	第1回の「震災ボランティア・NPO等による提案準備会合」が開催され、全体進行、テーブルファシリテーター、グラフィックカーとして支援（東京）
7・12	「災害復興支援情報交換メーリングリスト」の開設
7・15	FAJ「第1回活動報告・意見交換会」を実施（愛知）
7・19	文部科学省「第5回熟議に基づく教育政策形成の在り方に関する

9・20	「ふくしま会議」11月11～13日に実施予定の運営委員会等に参加(福島)	9・30	JCN全体会議の交流会を支援(東京)	12・1	JCN現地会議in福島の実施を支援(郡山)	3・3	主催のファシリテーション講座を支援(会津若松)
9・14	JCN制度チーム第8回ミーティングに参加(東京)	10・2	「スクラム釜石」新日鐵釜石ラグビー部OB会第7回会議にファシリテーターとして参加(東京)	12・2	JCN現地会議in宮城の実施を支援(仙台)	3・3	「NPOサミット2012」にて活動紹介(東京)
9・17～19	「Link with ふくしま」福島県安積高校出身の大学生有志主催のワークショップを支援(福島)	10・4	「つながろう南相馬」福島県南相馬市の市民団体の会議を支援(南相馬)	12・3	「2019年ラグビーワールドカップ釜石開催に向けた推進協議会」会議を支援(東京)	3・3	FAJ北海道支部定例会にて話題提供・募金活動(北海道)
9・11	福島県内の市民団体等を対象にしたヒアリングを実施(福島)	10・14	「つながろう南相馬」福島県南相馬市の市民団体主催のファシリテーション講座を実施(南相馬)	12・10	FAJ関西支部定例会にて話題提供・募金活動(兵庫)	3・4	FAJ九州支部定例会にて話題提供(福岡)
9・10	FAJ東北スクエア例会にて南三陸町での活動紹介・話題提供(仙台)	10・15	「JCN現地会議in岩手」の実施を支援(北上)	12・11	「Link with ふくしま」主催のファシリテーション講座を支援(福島)	3・6	「JCN現地会議in岩手」の実施を支援(大槌)
8・16～18	南三陸町歌津地区の子ども会バスツアーおよび漁業復興プロジェクトを支援(南三陸)	10・19	「ふくしま会議」の事務局会議を支援(福島)	12・17	FAJ東京支部定例会にて話題提供・募金活動(埼玉)	3・10	「ふくしま未来創造アイディア会議」の実施を支援(東京・福島)
8・6	「ヒマラヤンフェア・ネパール2011」にブース出展(東京)	10・26	JCN事務局会議に参加(半年間)(東京)	12・18	「スクラム釜石」会議においてNPO設立・運営に関するアドバイス実施(東京)	3・22	「支援者向けファシリテーション講座」の実施を支援(気仙沼)
8・4	「第6回震災ボランティア・NPO等と各省庁との定例連絡会議」を総合同会等として支援(東京)	11・1	サポーター制度の新設	12・19	「南相馬 未来へのダイアログ」ワークショップの実施を支援(南相馬)	3・23	南三陸町災害ボランティアセンター主催「南三陸町復興支援要請説明会」に向けたヒアリング実施(南三陸)
8・1	「スクラム釜石」新日鐵釜石ラグビー部OB会第7回会議にファシリテーターとして参加(東京)	11・11	「JCN現地会議in岩手」の実施を支援(北上)	1	「アースデイ福島実行委員会」を支援(福島)	3・25	「みんな共和国」の実施を支援(南相馬)
7・25	JCN制度チーム第7回ミーティングに参加(東京)	11・11～13	「ふくしま会議」において、福島市での全体会議、わかもの会議、南相馬市・相馬市・飯館村でのバスツアーを支援(福島)	1・9	「生活不活発病予防ガイドライン策定会議」の実施を支援(東京)	3・25～26	「東北×東京合同プレ合宿」の実施を支援(仙台)
7・24	「スクラム釜石」新日鐵釜石ラグビー部OB会の第6回ミーティングにファシリテーター等として参加(東京)	11・12	FAJ「沖繩サロン3周年記念イベント」にて募金活動(沖繩)	1・23	「南相馬 未来へのダイアログ」ワークショップの実施を支援(南相馬)	3・28	「南三陸町復興支援要請説明会」の実施を支援(東京)
7・22	FAJ「第1回活動報告・意見交換会」を実施(東京)	11・14	「南相馬 未来へのダイアログ」ワークショップの実施を支援(南相馬)	2・12	「生活不活発病予防ガイドライン策定会議」の実施を支援(東京)	3・30	「広域避難者支援に関する意見交換会」の実施を支援(東京)
9・20	「ふくしま会議」11月11～13日に実施予定の運営委員会等に参加(福島)	11・21	「神戸の吉富志津代さんを囲む会」の実施を支援(いわき)	2・14	JCN現地会議in宮城の実施を支援(松島)	4・3～4	南相馬ダイアログ主催「みんな共和国」の実施を支援(南相馬)
		11・28	「南相馬 未来へのダイアログ」ワークショップの実施を支援(南相馬)	2・17～19	「南相馬ダイアログフェスティバル」の実施を支援(南相馬)	4・8	「アースデイ福島」実行委員会を支援(福島)
				2・24	JCN現地会議in福島の実施を支援(郡山)	4・14	体制を再構築。ボード・クルー
				2・26	「Link with ふくしま」		

2012年

10・2 「ふくしま復興支援シンポジウム」の実施を支援（釜石）

9・22～23 「釜石市仮設住宅連絡員意見交換会」の実施を支援（釜石）

8・25～26 「ともだちカッパ〜東北復興はラクビーとともだち」の実施を支援（柴田）

8・23 「JCN広域避難者支援ミーティングin山形」の実施を支援（山形）

8・22 「第4回JCN現地会議in宮城」の実施を支援（仙台）

8・14 「JCN広域避難者支援ミーティングin近畿」の実施を支援（大阪）

7・27 「JCN広域避難者支援ミーティングin近畿」の実施を支援（大阪）

7・21 「南相馬ダイアログ対話会」の実施を支援（南相馬）

7・19 「東京農大学生会議に向けてのファシリテーション講座③」を実施（全3回）（東京）

7・18 「JCN広域避難者支援ミーティングin近畿」の実施を支援（大船渡）

7・13 「JCN広域避難者支援ミーティングin東海」の実施を支援（愛知）

7・04 「世界防災閣僚会議in東北」サイドイベントの実施を支援（仙台）

6・28 「第4回JCN現地会議in岩手」の実施を支援（大船渡）

6・12、21 「JCN広域避難者支援ミーティングin東海」の実施を支援（福島）

5・19～20 「JCN広域避難者支援ミーティングin東海」の実施を支援（福島）

4・24 「JCN広域避難者支援ミーティングin東海」の実施を支援（福島）

10・6 「ム」の実施を支援（郡山）

10・24 「FAJ「しゃべり場in中国」実施（広島）

11・3 「広域避難者支援ミーティングin四国」の実施を支援（愛媛）

11・3 「FAJ「しゃべり場in北海道」実施（北海道）

11・3 「FAJ「しゃべり場in九州」実施（福岡）

11・6 「第5回東日本大震災支援全国ネットワーク現地会議in岩手」の実施を支援（盛岡）

11・10 「FAJ「しゃべり場in沖縄」実施（沖縄）

11・22 「第19回南相馬ダイアログ」の実施を支援（南相馬）

11・28 「第4回JCN現地会議in福島」の実施を支援（二本松）

12・3 「第5回JCN現地会議in宮城」の実施を支援（仙台）

11・23 「FAJ「しゃべり場in東北」実施（仙台）

12・11 「JCN広域避難者支援ミーティングin中国」の実施を支援（広島）

12・23 「第20回南相馬ダイアログ」の実施を支援（南相馬）

2013年

1・12 「復興・減災フォーラム」の実施を支援（兵庫）

2・7 「FAJ「しゃべり場in東京」実施（東京）

2・16 「南三陸町青年異業種勉強会」の実施を支援（南三陸）

2・17 「復興のためのファシリテーション」の実施を支援（郡山）

2・22 「共に生きる」フォーラムの実施を支援（仙台）

2・24 「第22回南相馬ダイアログ」の実施を支援（南相馬）

2・26 「JCN広域避難者支援ミーティングin九州」の実施を支援（福岡）

2・27～28 「共に生きる」フォーラムの実施を支援（仙台・郡山）

3・2～3 「静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練」に参加（静岡）

3・7～8 「共に生きる」フォーラムの実施を支援（仙台）

3・8 「JCN第6回現地会議in岩手」の実施を支援（釜石）

3・12 「JCN第5回現地会議in福島」の実施を支援（いわき）

3・17 「復興のためのファシリテーション初級講座・福島会場」の実施（福島）

3・21 「JCN第6回現地会議in宮城」の実施を支援（石巻）

3・24 「JCN広域避難者支援ミーティングin東京」の実施を支援（東京）

3・24 「南相馬ダイアログin東京」の実施を支援（東京）

3・25 「JCN広域避難者支援ミーティングin北信越」の実施を支援（新潟）

3・25 「FAJ「しゃべり場in新潟」実施（新潟）

3・27 「防災・減災の取り組みを学ぶ」の実施を支援（新潟）

3・31 「移動寺子屋in東京」の実施を支援（東京）

4・9 「復興のためのファシリテーション初級講座・岩手会場」の実施（大船渡）

5・21 「今後の災害に備えて〜企業とNGOの連携について考える〜」の実施を支援（東京）

6・14～15 「広域避難者支援事業キーパーソン会議」の実施を支援（東京）

6・21 「いわて連携復興センター合宿ミーティング」の実施を支援（雫石）

7・11 「JCN現地会議in福島」の実施を支援（南相馬）

7・18 「JCN広域避難者支援ミーティングin東京」の実施を支援（東京）

7・24 「市民社会による支援の合同レビュー及び世界への教訓発信プロジェクト」の実施を支援（東京）

7・31 「JCN広域避難者支援ミーティング全国版」の実施を支援（東京）

8・10 「震災がつなぐ全国ネットワーク若手幹事会合宿」の実施を支援（東京）

8・23 「双葉町青春の集い」の実施を支援 ※協力・Link with ふくしま（郡山）

8・27 「JCN現地会議in宮城」の実施を支援（南三陸）

9・8 「JCN広域避難者支援ミーティングin中国」の実施を支援（広島）

9・13 「ひよっこりひよつたん塾」の実施を支援（大槌）

9・31 「JCN現地会議in福島」

10・3	「実施を支援（会津若松）」 「市民社会による支援の合同レ ビュー及び世界への教訓発信プロ ジェクト」の実施を支援（遠野） 「市民社会による支援の合同レ ビュー及び世界への教訓発信プロ ジェクト」の実施を支援（仙台） 「市民社会による支援の合同レ ビュー及び世界への教訓発信プロ ジェクト」の実施を支援（岩沼）
10・8	「市民社会による支援の合同レ ビュー及び世界への教訓発信プロ ジェクト」の実施を支援（岩沼）
10・10	「市民社会による支援の合同レ ビュー及び世界への教訓発信プロ ジェクト」の実施を支援（福島） 「ひよっこりひょうたん塾」の実 施を支援（大槌）
11・29	「JCN現地会議 in 宮城」 の実施を支援（岩沼）
12・13	「JCN現地会議 in 福島」の 実施を支援（郡山）
12・15	「ひよっこりひょうたん塾」の実 施を支援（大槌）
12・17	「JCN広域避難者支援ミ ーティング in 山形」の実施を支援 （山形）
1・12	「復興・減災フォーラム」の実施 を支援（兵庫）
1・25	「防災とボランティアの集い」の 実施を支援（東京）
2・18	「JCN現地会議 in 宮城」 の実施を支援（松島）
3・1～2	「静岡県内外の災害ボランティア による救援活動のための図上訓 練」に参加（静岡）
3・9	「ひよっこりひょうたん塾」の実 施を支援（大槌）
3・12	「復興支援専門家のインタビュー 記録」発行 ※協力：金香百合氏

3・18	櫻井常矢氏、篠原辰二氏、野崎隆一氏、 浅見雅之氏
4・5	「JCN広域避難者支援ミ ーティング in 東海」の実施を支援 （愛知）
6・16	「騎馬武者ロックフェス実行委員 会」全体会議の支援（南相馬） 「南相馬市市民活動サポートセン ターファシリテーター研修」第 1回の実施（南相馬）
6・17	「支援室立ち上げ秘話イン タビュー」の実施（東京）
7・6	「南相馬市市民活動サポートセン ターファシリテーター研修」第 2回の実施（南相馬）
7・25	「騎馬武者ロックフェス応援企 画」の実施を支援（東京）
8・12	「読み語り会×専門家インタ ビュー記録」の実施（広島）
8・22	「フアシリテーション技術・クリ ティカルシンキング講座」の実施 （福島）
8・23	「東日本大震災支援全国ネット ワーク現地会議 in 岩手」の 実施を支援（北上）
8・29	「南相馬市市民活動サポートセン ターファシリテーター研修」第 3回の実施（南相馬）
9・22	「日弁連災害復興支援委員会と の意見交換会」の実施（東京） 「心のケア拠点づくり事業研修 会」の実施を支援（愛媛）
9・22	「JCN現地会議 in 宮城」 の実施を支援（気仙沼）
9・22	「JCN現地会議 in 宮城」 の実施を支援（気仙沼）
10・6	「JCN現地会議 in 宮城」の 実施を支援（愛媛）
10・29	「JCN現地会議 in 宮城」 の実施を支援（気仙沼）

10・30	「やまがた避難者支援協働ネット ワーク全体意見交換会」の実施 を支援（山形）
11・17	「JCN現地会議 in 福島」の 実施を支援（いわき）
11・17	「南相馬市市民活動サポートセン ターファシリテーター研修」第 4回の実施（南相馬）
11・20	「大谷里海づくり検討委員会」 の実施を支援（気仙沼）
12・11～12	「首都直下地震時の災害ボラン ティア活動連携訓練」への参加 （東京）
12・18～19	「広島市土砂災害支援活動を行 う団体の情報交換会」の実施を 支援（広島）
12・19	「南相馬市市民活動サポートセン ターファシリテーター研修」第 5回の実施（南相馬）
12・20	「フアシリテーション講座」の実 施を支援 ※協力：青木将幸氏（南 相馬）
1・9	「南相馬市市民活動サポートセン ターファシリテーター研修」第 6回の実施（南相馬）
1・24	「読み語り会×専門家インタ ビュー記録」の実施（東京）
2・6	「JCN現地会議 in 福島」の 実施を支援（南相馬）
2・25	「南相馬ダイアログ」実施を支援 （南相馬）
2・27	「JCN現地会議 in 宮城」の 実施を支援（岩沼）
3・2	「被災者の手作り商品」応援ワ ーク

3・4	クシヨップ」実施を支援（東京） 「曹洞宗青年会全国大会」ワー クショップ「お坊さんと一緒に考 える復興支援のあり方」の実施 を支援（愛媛）
3・5	「南相馬市市民活動サポートセン ターファシリテーター研修」フォ ローアップの実施（南相馬）
3・6	「JCN現地会議 in 岩手」実 施を支援（大船渡）
3・7	「読み語り会×専門家インタ ビュー記録」の実施（秋田）
3・7～8	「静岡県内外の災害ボランティア による救援活動のための図上訓 練」に参加（静岡）
3・21	東北スクエアイベントにおいて、 岩手・宮城・福島から話題提供 者（NPO法人気仙沼まちづくりセ ンター・三浦友幸氏、株式会社建設技 術研究所・伊藤義之氏、NPO法人 コースター・岩崎大樹氏、福島県浪江 町・小林直樹氏、NPO法人陸前高 田まちづくり協働センター・小野寺浩 樹氏、株式会社トーション・日下智子氏） を迎え分科会を実施（仙台） 被災3県（岩手、宮城、福 島）において、継続的に学び合 う「ラーニングコミュニティ」を立 ち上げ、第1回目を3県3ヶ所 で開催（大船渡・石巻・福島）
3・27～29	※「東日本大震災支援全国ネットワーク」は 「JCN」と記載させていただきました

# ファシリテーション用語解説

本報告書では復興支援活動をご紹介する中で、さまざまなファシリテーションの活用シーンが記載されています。ここでは、その中で私たち災害復興支援室メンバーが頻繁に使用する用語をまとめてみました。本報告書をお読みいただいた皆さまの、今後の活動にお役に立てれば幸いです。

## 【アイスブレイク】

人と人のわだかまりを解いたり、話し合うきっかけをつくるためのちょっとしたゲームやクイズ、運動などのこと。活動の冒頭に行うことが多い。「氷」のような雰囲気のある場をあたためることからアイスブレイクと呼ばれる。参加しやすさを創り出す。

## 【言い換え】

ファシリテーターが、参加者の背景や状況を踏まえて、使用する言葉を変えること。参加者の多様性を想定して、誰でも参加しやすいように、難解な言葉使いやカタカナ用語を避けるなどの配慮が求められる。

## 【インストラクション】

「説明や指示」のこと。ファシリテーターが使うインストラクションは、参加者に対して「取って欲しい（特定の）動作」を改めて伝えることを指す。開始直後におけるオリエンテーションで伝える内容の多くはインストラクションであるほか、ワークや話し合いの進め方を個々に説明する際など、その使用頻度は高い。いかに参加者に分かりやすく、皆が迷いなく動けるかを考えて話すことが求められる。参加者の属性や事前の知識・準備状態などを事前に推し量ってインストラクションの細かさを決めることも必要。

## 【オリエンテーション】

話し合いやワークショップを開始するにあたり、参加者に対して、全体の流れをファシリテーターが説明することが多い。何のために、どんなゴールを目指して、どんな順番（進め方）で、どんなことに注意しながら進行する予定なのかを、最初に参加者と共有することがオリエンテーションである。通常はOARR

**O u t c o m e** (アウトカム) || 目指すこと

**A g e n d a** (アジェンダ) || アジェンダ、

今日の流れ

**R o l e** (ロール) || 役割

**R u l e** (ルール) || お約束

を説明し確認することがオリエンテーションになる。本書14ページには、参加者全員でOARRを決めることからスタートした事例を挙げている。

## 【紙芝居】

ファシリテーターが、インストラクションや問い（質問）を参加者に伝える際に使用する紙。話しながら次々に紙を出すことから「紙芝居」と呼ばれるようになった。多くの場合A4サイズ横使いで太い水性ペンで伝えたいことが書かれている。ファシリテーターは説明の流れに沿って、ホワイトボードや壁に貼っていく。パソコンとプロジェクターによる伝え方より手軽なうえ、柔軟性に富んでいる反面、紙が小さいため大人数の際には使いづらくなる。

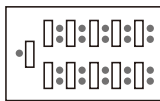
## 【空間レイアウト】

実際の現場では、会議室ばかりではなく、ホテルの宴会場や寺、体育館や和室といったさまざまな施設を使うことがある。参加人数とプログラム、ホワイトボードの数や模造紙などを貼るための壁や窓、ガラス、ドアといった会場の形態に応じてレイアウトを変更することが求められる。

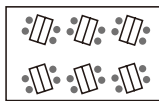
特に講演やシンポジウムの後、参加型の場を作る場合、レイアウトの変更を恐れず実施することで場の雰囲気などが大きく展開する場合もある。その目的に応じて

さまざまなレイアウトを作っていく。本書19ページや21ページに挙げた事例のように、中央に関係者を配置し、周辺にその他の参加者席をつくるといったレイアウトで、中央の話し合いを周辺で共有することもできる。

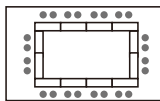
空間レイアウト例机あり



教室型：講師や演者の話に集中する座学に向いている



アイランド形式：グループでの話し合いに向いている。ワークショップ型ともいう



口の字/Uの字型：各々が資料など見ながらひとつの話題を話すのに向いている

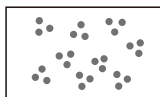
空間レイアウト例机なし



サークル型(円)：全員顔が見え、お互いの話をじっくり聞け、一体感が出やすい



扇型(半円)：サークル型で、ホワイトボードやスクリーンなどがある時に向いている



分散型：少人数で自由に座り、おしゃべりをするような気軽な雰囲気を出す時に向いている

## 【グループサイズ】

一緒に話し合いをする人数のことをグループサイズと呼ぶ。7〜8名を越えるグループが全員一緒に話し合いをしようと、多く発言するひとと、しない(できない)ひとが出てきやすい。

それに対処する方法のひとつが、小グループに分けて(グループサイズを小さくして)話しをすることである。その場合は二人(ペア)、三人(トリオ)など種々のサイズがある。人数が多いほど、時間は多く取る必要がある。また、グループサイズは一人もあり、それはひとり(個人)で考えてもらうことに相当する。ひとり考えてもらう時間を作ることで、その後の小グループの話し合いが進みやすくなることが多い。途中でグループサイズ変更については、本書14ページや24ページなどの事例参照。

## 【傾聴】

ファシリテーターが、参加者と、参加者の発言内容を理解しようと、「ここを傾けて集中して聴くこと。スキルというより「そのままを受け止める」という姿勢。

## 【事前準備(コーディネーション)】

事前準備(コーディネーション)では、持たれる話し合いの背景にある課題や参加する方たちのことをよく知ったうえで、話し合いの目的、アウトカム(目指す状態)を明確にすることが望ましい。そ

のためには主催者との事前の打ち合わせで思いや周辺情報を丁寧に共有し、ともに考えながら進めることが重要。事前準備もファシリテーションの一部である。本書13ページの事例では、主催者の思いをじっくり聴くことから始めている。

## 【全体共有】

複数のグループに分かれて、話し合いやワークを一定時間行なったあと、「他のグループがどのような話し合いをしていたのか」を互いに知るのが全体共有。各グループの代表者にワークや話し合いの成果物を示しながら発表してもらう方法以外に、回遊方式で自由に他のグループの成果を見に行く方法、グループ内の説明者を1〜2名決めて、他のグループからの見学者に説明してもらいながら、その他のメンバーは見学者として他のグループの説明を聞いて回るなどの方法もある。

## 【タイムキープ】

ファシリテーターが、時間の制限のある中で進行する上で時間管理をすること。始める前に時間を讀んでプログラムをするが、機械的に時間を切るのではなく、目的に向かって臨機応変に進めていく。

## 【チェックイン、チェックアウト】

ホテルに宿泊するときにフロントで名前を書く(チェックインする)ように、話し合いの場でも、

自分の名前や今の気持ちなどを、全員がひとことずつ話すことで、その後の話し合いに参加しやすくすることを（話し合いにおける）チェックインと呼ぶ。同様に終了時に今の話し合いを終えた感想などをひとことずつ話すのがチェックアウト。

## 【問い】

プログラムの中で参加者に考えてもらいたい質問やテーマ。ファシリテーターは、その場の目的、アウトプットやアウトカムなどを踏まえて、事前に問いを作成しておく。プログラム作成において重要な位置をしめる。本書23ページなどの事例を参照。

## 【バズセッション】

参加者が数人で話をすることを指す。参加者一人ひとりが感想などを自由に言える場を作ることが目的なので、3〜4人程度の少人数で実施する。発表などを課すものではなく、思っていることなどを自由に共有する。講演やシンポジウムの後に、これを数分間でも持つようにすると、参加者の理解が深まったり、わからないことなどが明確になり、参加感を増す効果が期待できる。本書25ページの事例を参照。

## 【ファシリテーション・グラフィック（話の見える化）】

話し合いを「見える化」する手法。「板書」と

いわれることもある。話し合いと同時進行で、その内容をホワイトボードや模造紙に書き出していく。話し合っていることがその場で文字になることから、筋道がわかりやすくなる、発言同士の関係性が構造的に整理されるなどの効果がある。ファシリテーターが担う場合もあるし、別に「グラフィッカー（板書係）」を設ける場合もある。

## 【ファシリテーターチーム】

ファシリテーターは、進行役とグラフィッカーの役割に分かれて実施することがある。また規模やプログラムに応じて、全体進行をするメインファシリテーターとグループのファシリテーターをするグループファシリテーターに役割を分ける場合がある。その他、タイムマネジメントや何か予測しない事象が起きた時に支援する遊軍と呼ばれるメンバーや、記録者を含めたチームで場を作っていくと、さまざまな状況に対応することができる。

## 【ふりかえり】

体験や活動を思い起こし、そこから次に生かせる学びを得ること。リフレクション、省察ともよばれる。いわゆる反省会のように、良くなかったことばかり考えるのではなく、うまくできたことも学びの素材として扱う。KPT（Keep）よかったこと、Problem改善すること、Tryallあらたに試みる（こと）などがある。本書18ページの

KPTを用いた事例を参照。

## 【フレーム】

ものごとを整理したり、考えやすくするために参加者内で共有される一定の「枠（フレーム）」のこと。たとえば複数のグループが、ひとつのテーマで同時に話し合いをするような場合、共通のフレームを使用すれば、全体での共有がしやすくなる。本書25ページには、あらかじめフレームを提供した事例を挙げている。

## 【プログラム（アジェンダづくり）】

参加者の「参加のハードル」を下げるプログラムを作ることが多い。教える教わるという関係になりがちな講座などを、自分のものとして感じてもらうようなプログラムにしたり、参加者の経験、実感を思いだし、語り合ってもらったり、答えがたくさんあったとしても、限られた時間の中で、それぞれ参加者の多様な背景や意見を共有しやすいように流れをつくっていくことが大切となる。

## 【プロセス】

一般的には過程、手順と理解されているが、ファシリテーションでは、表面に現われていないことも含めその場に起こっていることもプロセスという。参加者の発言と発言の間にある表情の変化や沈黙などもプロセスになる。



## 特定非営利活動法人 日本ファシリテーション協会 (FAJ) 概要

日本ファシリテーション協会は、ファシリテーションの普及を目指してつくられた民間非営利団体です。2004年1月に、内閣府より特定非営利活動（NPO）法人の認証を受けました。

名称 特定非営利活動法人 日本ファシリテーション協会  
会員数 個人会員 約 1,800名 法人会員 1社（2015年5月現在）  
拠点 北海道、東北、秋田、新潟、東京、埼玉、富山、中部、関西、和歌山、岡山、四国、中国、九州、沖縄

### ミッション

**多様性を認め合い、人の力を引き出し、組織と社会を協働創造します。**

日本ファシリテーション協会は、ファシリテーションの普及・啓発を目的とした特定非営利活動法人です。ファシリテーションの普及を通じて、ビジネスの分野においては、生産性・モチベーション・リーダーシップ力を向上させ、社会的な分野では、市民活動・地域経営・国際交流の質を高め、教育の分野では多面的な視点を持つ人材を育成していくことをめざしています。

ビギナーからプロフェッショナルまで、ビジネス・まちづくり・NPO・教育・環境・医療・福祉など、多彩な分野で活躍するファシリテーターが集まり、多様な人々が協働しあう自律分散型社会の発展をめざして、幅広い活動を展開していきます。

### 事業内容

- 調査・研究事業：ファシリテーション・スキルを確立し、新しい技術を開発する
- 教育・普及事業：ファシリテーションを広く普及し、優れたファシリテーターを養成する
- 支援・助言事業：幅広い分野のファシリテーション活動を、専門的な立場から支援する
- 交流・親睦事業：内外の幅広いネットワークを通じ、多様なファシリテーターのハブとなる

日本ファシリテーション協会ウェブサイト

トップページ <http://www.faj.or.jp>



災害復興支援室ページ

(日本ファシリテーション協会ウェブサイト内)



『復興支援専門家のインタビュー記録』、  
『情報を見える化しませんか?』リーフレットがダウンロードできます



ごあいさつ

災害復興支援室長

徳田 太郎



常総市水害対応NPO連絡  
会議にて(2015年10月)

あの日から、4年半の月日が流れました。改めて、地震や津波、およびその後の避難生活での肉体的・精神的疲労や環境の悪化などが原因でお亡くなりになった方々のご冥福をお祈り申し上げます。そしてまた、災害をきっかけに縁ある大切な人を亡くした方、家や土地、船、思い出の品々、あるいは「故郷そのもの」といった、かけがえないものを失われた方、今なお避難生活で苦難のただなかにいらっしゃる方など、さまざまに、静かに心を向けたいと思います。

失われたつながりを機能的に回復すること、それにより、一人ひとりに居場所があり、役割と出番があり、参加があり、関係がある、そのような「誰ひとり排除されることのない社会」を築いていくために、ファシリテーションができることは、まだまだたくさんあるはずだ——。4年半、常に自分に言い聞かせながらの活動でした。

困難に直面している方々に対する、直接的な支援でなくとも、連携と協働により社会的排除の構造と要因を克服するためのネットワークをつくり、育んでいくことも、復興支援の、大切なひとつの形であり、そこでファシリテーションが果たす役割は、ますます大きくなっていくはずだ——。そう唱え続けることだけが、心の支えとなる日々でした。つまりは、無力感と向きあう日々でもあったのです。

ほんとうのところ、ファシリテーションで、いったい何ができるのだろうか、と。

しかし、そもそも、私たちの社会は、小さくて、弱くて、ゆつくりで、さまざまであるような活動によって織りなされているのではないでしょうか。

ファシリテーションもそのような営みの一つであり、だからこそ私たちは、たとえどんなに無力

に思えても、いくつもの「つながり」や「かかわり」を生み続け、育て続けてきたのでしよう。

そのことが、「東北」「被災地」「復興」などの大文字の言葉があふれる中で、いつの間にか「歴史」へと追いやられてしまうことへの抵抗になるのであれば、そしてそれが、ひとりでも多くの方の、身体的・心理的な孤独や孤立を防ぎ、希望を紡ぐことにつながる可能性が少しでもあるのであれば、相変わらずの小さな歩みを、一つひとつ積み重ねていくことにも、意味があると思うのです。

大槌で、釜石で。南三陸で、石巻で。南相馬で、いわきで。さまざまな場所で、私たちは日々変化していく風景を見つめてきました。

しかし、「変わった」ということは、「終わった」ということと同じではありません。

そしてまた、東日本大震災以降も、全国で自然災害が頻発しています。

復興とは何か、支援とは何か、ファシリテーションとは何か。意味を問いながらの私たちの活動もまた、「終わる」ということがない道のりなのでしよう。

これまで活動を共にしてくださいましたみなさまに、そしてさまざまな形でご協力くださいましたみなさまに感謝申し上げますとともに、引き続きのご支援をお願いして、結びの言葉とさせていただきます。



「ファシリテーション わたしたちにできること」

特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会

災害復興支援室

2011年3月～2015年3月

2016年1月18日発行

編集 特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会

災害復興支援室

徳田太郎、鈴木まり子、遠藤智栄、杉村郁雄、

尾上昌毅、飯島邦子、浦山絵里、浅羽雄介、

加藤貴美子

発行 特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会

東京都渋谷区千駄ヶ谷三丁目12番8号

[www.faj.or.jp](http://www.faj.or.jp)

お問い合わせ(Eメール) [fukkou311@faj.or.jp](mailto:fukkou311@faj.or.jp)

販売価格 500円(税込)